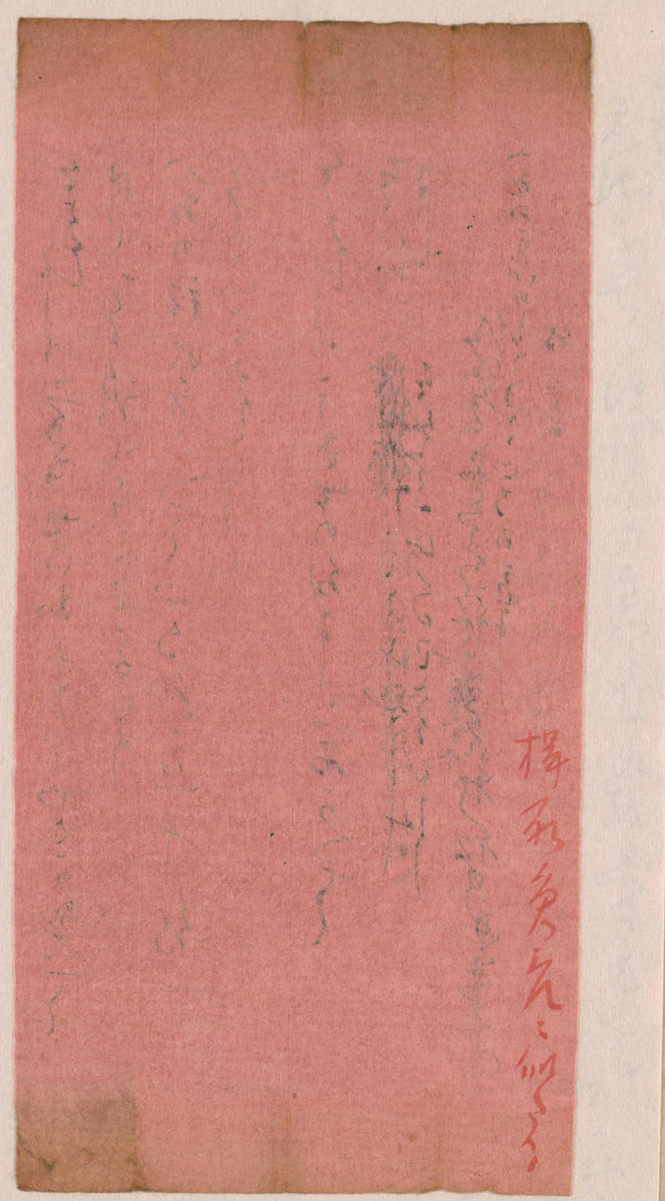

千歌　全

は
46

別圖

6-3
1-4

千歌

稲生魚彦撰
写本

全

は
46

東京圖書館
和書門
和歌類
別函
七架
一二一號
一冊

不許帶出

ガラス使用

千類本まき

第一

天　日　月　雲　霞

霧　雷　雨　時雨　露

霜氷　雪　風　嵐

第二

春はしめ　初子　白馬　夏　秋

七夕　冬

第三

国　都　ふるき都　里　古へ

むさしの　田　山家　川　海

浦　嶋　濱　みなと　渚

ガラス使用

は　　松

第四

松　　桜　　杉　　梅　　柳

椿　　藤　　山吹　　楓　　桃

はゝし　　卯の花　　橘　　槿　　菖蒲

竹　　[illegible]　　[illegible]　　[illegible]　　なでしこ

まさき草にうきつゞらに　　あやめ草　　ぬなは　　菱

萩　　すゝき　　をみなへし　　をとこをとこれの花

ふゆ　　きくして　　せり　　[illegible]

第五

霧　　一年の　　うるしす　　ころもち　　よみこゝろ

[illegible]杉　　野　　うつ　　居まの居

ちとせまし[illegible]　　康　　りはつ　　りこうし

さゝえ

そうりを[illegible]

第六

神　　太夫　　兄　　父母　　子

孫　　海人　　かうとる　　[illegible]　　あまさみ

ねちけ人　　はうちゃう

第七

きうめ人　　いそしき　　ほうする　　まこみあ　　まこてあるあ

まなぶて　　あいさつ　　おもむく　　嫌ひする　　おやさうな

久まんかうは　　出世　　からえ　　人をのみ　　出世ひゃき

おもひもとむ　忍ひまぬ　おもひ寄す　あれ人をとふ
たまさかに人をとふ　まれ人をとふ

第八

いも　人はなれ　せき　わすれぬ　まくらは
うきこゑ　うとのかや　いつまて　かみ風　人まつ
ゆくえ　人の名　人目　名をしも
あしまね　くるむ　かくこと　おもひに　うらむ
ねさめ　思ひあへ　いあ　いねつて　ひとりよるの風
うつなひ　（ちとり）神ならふ　神をうらみ　くやしさ

第九

まよれ　旅　旅なる人を見て

第十

杉　家　酒　う新し之　祝

千歌なゝ美

第一

天　近江大は宮皇后御歌

二廿三
あまのはらふりさけみれはおほきみのみいのちはなかくあま（あまたらしたり／そらにみちたる）

日　柿本人麻呂

一廿二
ひむかしのゝにかきろひのたつみえてかへりみすれは月かたふきぬ

中大兄命

一十二
わたつみのとよはたくもに入日さしこよひのつくよあきらけく（さやけかりこそ）

初月　間人大浦

三廿九
あまのはらふりさけみれはしらまゆみはりてかけたる夜路はよけむ

いさよふ月　沙弥満誓

三卅一
みえすともたれこひさらめ山のはにいさよふ月をよそにみてしか

ガラス使用

作者未詳

七三 山のはにいさよふ月をいでんかとまちつゝをるに夜そくたちける

月　湯原王

六九八 あめにます月よみをとこまひはせんこよひのながさいほよつきこそ

作者未詳

七三 あめの海に雲の浪たち月のふね星の林にこきかくるみゆ

あすのよひてらん月夜（ツクヨ）はかたよりにこよひによりて夜なかゝらなん

七 ゆぎかくるとものをひろき大伴に国さかえんと月はてるらし

九十二 もゝしきの大宮人のまかりいでてあそふこよひの月のさやけさ

霜くもりすとにかあるらん久かたのよわたる月のみえなくおもへは

十四八 いもかあたりわか袖ふらん木の間よりいてくる月に雲なたなひき

大伴家持

十七五十 珠洲の海にあさびらきしてこきくれは長濱の浦に月てりにけり

大伴池主

十八十三 月みれはおなし国なり山こそは君かあたりをへたてたりけれ

[illegible]　作者未詳

十四八 白露を玉になしたる長月のありあけの月夜みれとあかぬ鴨

かくるゝ（くむ）月　[illegible]

七九 ぬばたまの夜わたる月をとゝめんに西の山辺に関もあらぬかも

[illegible]　弓削皇子

三十三 滝の上のみふねの山にゐる雲のつねにあらんとわかおもはなくに

[illegible]　春日王

三十四 大君は千年にまさん白雲もみふねの山にたゆる日あらめや

作者未詳

七五
あしひきの山川の瀬のなるなへにゆつきかたけに雲たちわたる
大あま[illegible]もあ[illegible]まれたるの[illegible]ゆきまつ[illegible]
はなみれは[illegible]のみれいるてかはちふ[illegible]
なにか[illegible]はなかり[illegible]をゆめのうちもなほのこりなむ
[illegible]
従三位[illegible]

十五
ひさかたのあまのかはらにゆくへ[illegible]
いまこそ人の[illegible]けん枝のうへにあ[illegible]
ちるの[illegible]むしの[illegible]れのきの[illegible]
かけろひのゆふされはさいく人のゆふ[illegible]
[illegible]ゆきてあまてきあんといふ[illegible]
[illegible]かきのくもりきあまの[illegible]
さみたれ[illegible]のそらのあまの[illegible]

霰

同

[illegible]あられふる[illegible]あけてもなほ[illegible]
[illegible]川の瀬に流のもみちは

雪

同

なかとみのさはしとよみてさしくもる[illegible]
あさちふ[illegible]なかめまかせてかしこきあやも

雨

[illegible]

[illegible]くもりくる雨のみかりのさとは[illegible]
大僕[illegible]
[illegible]雨のそら[illegible]
従三位[illegible]
ゆふくれの雨[illegible]春雨のふるさとの[illegible]
[illegible]

志くれ秋

八之八
志くれの雨まなくしふれハみかさ山梢あまねく色つきにけり　大伴稲公

八四一
春日野に志くれふるみゆあすよりハもみちかさゝん高圓の山　藤原八束

八四五
志くれの雨まなくなふりそくれなゐに匂へる山のちらまくをしも　作者未詳

十四五
志くれの雨間なくしふれハまきの葉もあらそひかねて色つきにけり

十四九
秋田かるかりのいほりに志くれふりわか袖ぬれぬほす人なしに

十四六
よの宮にあさちる流くれたつのなかゝのこゝに志くれふりけし　家持　大伴書持

八四六
さをしかの妻よふ山の秋はきに志くれふりきて散る志くれ　作者未詳

十四二
秋萩をちらす長雨のふる比ハひとりおきゐて恋る夜そおほき

八四三
秋田の穂のうへにきりあふ朝霞いつへのかたにわか恋やまむ　天皇　大伴坂上郎女

四十
久かたのあまのかはらに天の川あまりにふれハ人もとひぬらん　作者未詳

十四二
秋萩の枝もとをゝに露霜おき寒くも時ハなりにける哉

日四三
淺茅原ちるもみちはの秋萩にうつろひにけりちらまくをしも　天皇　同

十三八
あきかせのよに庭のねさくしよわたれ天霧のまむきの秋ハ

十四
浅茅原庭の浅茅の萩にたつれたつともしらぬ我身のなりはてん　むらさき　同

十六二
かり鳴の枝も風にさそはれてなにをかさまよふひとりぬらん

雪　はつゆき　あはゆき

明日香清御原天皇（天武）大御歌

二十二
わかさとに大雪ふれりおほはらのふりにし里にふらまくはのち

こたへまつる　藤原夫人

わかをかの龗にいひてふらしめし雪のくたけしそこにちりけん

橘左大臣

六十二
ふるゆきのしろかみまてに大君につかへまつれはたふとくもあるか

舎人娘子

八五八
おほくちのまかみのはらに雪ふりて（ふる）いたくなふりそ家もあらなくに

柿本朝臣

十五九
あしひきの山ちもしらすしらかしの枝もとをゝに雪のふれゝは

九十二
みよしのゝ山のしらゆきつもるらしふるさとさむくなりまさるなり　坂上是則

十七
[illegible]雪のはね白ね[illegible]あまゆきてふる

[illegible]
やまのかひ[illegible]あるへ[illegible]ふらし

[illegible]

三廿二
風[illegible]白浪[illegible]のにしあ[illegible]

大伴宿禰

五七
[illegible]つれしとおもふあきを秋のせつきこと[illegible]ひつる光

小野老

六廿二
[illegible]なりわかおもひのかゝる[illegible]

[illegible]

九三十
我ゆきてなれのこゝろもさし[illegible]ゆめ[illegible]をわすれ

十四九
[illegible]も[illegible]かく[illegible]とをしらしあき[illegible]秋の夕(?)

萩の[illegible]さき[illegible]しおかのかなくは秋風ふく

大伴やかもち

廿十
ふるさとのならし花咲くらし秋萩もとよあけぬれはなくらむと

作者未詳

一十八
みよしのの山のあらしのさむけくにはたやこよひもわかひとりねん

第二

春のはしめ　作者未詳

十十二
冬すきて春のきぬれは年月はあらたまれとも人はふりゆく

初春　大伴家持

廿六三
あたらしき年のはしめの初春のけふふる雪のいやしけ吉事ごと

初子　同

廿五八
初春のはつねのけふの玉はゝき手にとるからにゆらく玉のを

白馬　同

水鳥の鴨の羽色のあをうまをけふみる人はかきりなしといふ

夏　藤原宮天皇（持統）太御歌

一十六
春すきて夏きたるらし白たへの衣ほしたりあまのかく山

秋　安貴王

八三九 秋きていくたひあへねハかのなみの風のまにまにたちかへりし見
おなしみよ　山上憶良
一三三 久方の天の川瀬に舟うけてこよひか君かわかりきまさん
一三三 秋の夜のなかきを思へはいつしかと君かきませる時そまちける
山部赤人
十廿五 やちほこの神の御代よりともし妻人しりにけりつきてしおもへは
あめつちとわかれし時ゆおのか妻しかそはなれてある秋まつ我は
廿六 ひさかたのあまつしるしとみなせ川へたてゝおきし神代しうらめし
あまの川みつかけくさの秋風になひくをみれは時はきにけらし
ひこほしとたなはたつめとこよひあふ天の川とになみたつなゆめ
十九 天の川やすの川原にさためてし神にはかへは時またなくに
ゆふつゝのかよふあまちをいつまてかあふきてまたん月ひとをとこ
秋風の吹にし日よりいつしかとあまのかはらにたちつゝひれかも
一九九 高麗にしきひもときかはし天人の妻とふよひそわれもしのはむ
あまの川瀬をはやみかもぬはたまの夜はふけにつゝあはぬひこほし
卅一 わたりもり舟わたせよとよふこゑのいたらねはかもかちのおとせぬ
玉かつらたえぬものからさぬらくは年のわたりにたゝ一夜のみ
一三二 秋風の吹にし日より天の川瀬に出たちてまつとつけこそ
あをなみに袖さへぬれてこく舟のかしふるほとにさよふけなんか
十五十八 秋草におく白露のあかすのみあひみるものを月をしまたむ
大伴家持
後 十五十七 秋といへは心そいたきうたてけに花になそへて見まくほりかも
前 一四 初秋風すゝしきゆふへとかんとそ紐はむすひし妹にあはんため
秋されは霧たちわたる天の川いしなみおかはつきて見むかも

廿五七

光

月[illegible]て[illegible]なり[illegible]

同

第三

國　作者未詳

九二十

しきしまのやまとの國はことたまのたすくる國ぞまさきくありこそ

都　小野老

三二八

あをによしならの都はさく花のにほふがごとく今さかりなり

作者未詳

六四五

[illegible]かぜの[illegible]ゆくへは[illegible]なりぬ

同

九四二

大君は神にしませば[illegible]水沼を都となしつ

壬申乱平定以後

七十

[illegible]川の[illegible]大宮ところ

贈右大臣御行卿

十九四一
大君は神にしませはあかこまのはらはふ田ゐを都と なしつ

ふるさとの歌

一廿九
楽波や志賀のからさきさきくあれと大宮人の舟まちかねつ

さゝなみの志賀の大わたよとむとも昔の人にまたもあはめやも

さゝなみの国つみ神のうらさひてあれたる都見れはかなしも

三二四
かくゆゑにみしといふものをさゝなみのふるき都を見せつゝもとな

右二首　高市黒人

作者未詳

六四二
くれなゐにふかくそみにしこゝろかもならの都にとしのへぬへき

世の中をつねなきものといまそしるならの都のうつろふみれは

一四六
咲く花のいろはかはらすもゝしきの大宮人そたちかはりける

大原今城

八四七
秋されは春日の山のもみち見るならの都のあるらくをしも

大伴家持

十九四八
あめつちにたらはしてらしてわか夫（大）君しきませはかもたのしきを里（ザト）

石川郎女

廿五七
大き海のみなそこふかくおもひつゝもひきならしゝ菅原の里

古以　大伴旅人

三卅
あさちはらつはらつはらにものおもへはふりにし里しおもほゆるかも

ひれ　山上憶良

五二六
あのはさにひれふりしよりともせまひつゝ歌のまつら まつらさよひめの

田　作者未詳

十四七
あしひきの山田つくるこひてすともなはたにはへよもるとしるかね

さをしかの妻よふ山のをかへなるわさ田はからしゝもはふるとも

ガラス使用

〃あか門にまち思ふこれハ浅茅のうちの秋萩ハさく [illegible]

山歌

明日香清御原宮天皇 天武大御歌

一ノ廿七 よき人のよしとよく見てよしといひしよしのよく見よよき人よく見つ

山部赤人

三ノ廿七 たこの浦ゆうち出てみれハましろにそふしのたかねに雪ハふりける

作者未詳

同ノ廿八 不尽のねにふりおける雪ハ六月のもちにけぬれハそのよふりけり

〃ふしのねをたかみかしこみあまくもいゆきはゝかりたなひくものを

七五 なるかみのおとのみきゝしまきむくのひはらの山をけふみつるかも

〃みもろのそのやまなみにこらかてをまきむく山はつきのよろしも

〃六 いにしへのことはしらぬをわれみてもひさしくなりぬあめのかく山

〃九 みしちあそねらまのうけもしらされ[illegible]けんとてねまおしは

〃三十 せのやまにたゝにむかへるいものやまことゆるせやもうちはしわたす

〃三十三 おほなむちすくなみ神のつくらしゝいもせの山をみらくしよしも

川

柿本人麿

三ノ六四 ものゝふのハ十氏川のあしろ木にいさよふ浪のゆくへしらすも

紀鹿人

六ノ九一 いはゝしりたきち流るゝはつせ川たゆることなくまたもきてみん

作者未詳

七五 あなし川河浪たちぬまきむくのゆつきかたけに雲ゐたつらし

〃六 ぬはたまのよるさりくれハまきむくの川とたかしもあらしかもとき

〃七 大君のみかさの山のおひにせるほそ谷川のおとのさやけさ

〃はつせ川流るゝみをのせをはやみゐてこすなみのおとのさやけく

ガラス使用

八
いにしへもかくきゝつゝやしのひけん此ふる川のきよきせのおとを

七八
わかひもを妹か手もちてゆふや川またかへりみん万代までに

一十
うち川は淀瀬なからしあしろ人舟よふ声はをちこちきこゆ

一十五
ちはや人うちのわたりのはやき瀬にあはすありとも後もわかつま

九十七
山高み白ゆふ花におちたきつなつみの川と見れとあかぬかも

海　　柿本人麿

三十六
けひの海（イむこの海の）にはよくあらしかりこもの乱れいつみゆ海人の釣舟

作者未詳

十二
あふ坂を打出（デ）てみれはあふみの海白ゆふ花に浪立わたる

浦　　柿本人麿

一十七
あこの浦に船のりすらんをとめらかあかものすそにしほみつらん

田口益人

三九二
ひるみれとあかぬたこの浦大君のみことかしこみよるみつるかも

作者未詳

七十六
いなみ野は行過ぬらしあまつたふひかさの浦に浪たてりみゆ

崎　　柿本人麿

一廿
くしろつくたふしの崎にけふもかも大宮人の玉もかるらん

作者未詳

七十五
あられふりかしまの崎を浪たかみすきてやゆかん恋しきものを

はま　　同

六四七
はまきよみうらうるはしみ神代より千ふねのはつる大わたの浜

七十三
大とものみつの浜へを打さらしよりくる浪のゆくゑしらすも

藤原八束

十九四八
松かけのきよき浜へに玉しかは君きまさんかきよき浜へに

ガラス使用

湊

七九一 あはぢしまゐのうへ吹らし水なとの関のこなたに浪さわぐなり

島

一十五 うちそを麻績の大君あまなれやいらごの島の玉もかります

こたへ　麻績王

うつせみの命ををしみ浪にぬれいらごの島の玉もかりをす

泊　穂積老

三廿二 わが命まさきくあらばまたもみむ志賀の大津によする白浪

船　野足人

一十六 人ごとをあらくしげみしかぢまをはなちしふねのゆくべしと舟のへすすむ

沙弥満誓

一三三 世の中をなにゝたとへんあさびらきこぎいにし舟の跡なきがごとし

船王

六卅 まゆのそこやゆまとの原あはのとわけてこぐ舟よりきこて

山辺赤人

七十二 さよふけてほりえこぐなる松浦舟かぢのおとたかしみをはやみかも

一七七 朝なぎにかぢのおときこゆみけつくに野島のあまの舟にしあるらし

十七三 けひの海のにはよくあらしかりこものみだれいづみゆあまのつり舟

十八十三 ほりえよりみをひきしつゝみ舟さすしづをのともは川のせまうせ

ガラス使用

第四

松　　長皇子

一 六五
あられうつあられ松原すみのえのおとひをとめと
みれとあかぬかも

川島皇子

一 三四
しらなみの濱松かえのたむけくさいくよまてにかとしのへぬらん

有馬皇子

二 一四一
いはしろの濱松かえをひきむすひまさきくあらは
またかへりみん

作者未詳

七 一一五九
住のえの岸の松かねうちさらしよせくる浪の音のさやけさ

九 一七九五
いもらかりいまきのみねにしけりたつつま松の木はふる人見けん

檜　　は

七 一一一九
ゆく川のすきゆく人のたをらねはうらふれたてり
三輪の檜原は

杉　　丹生王

三 四二二
いそのかみふるの山なる杉むらのおもひすくへき
きみにあらなくに

梅　　作者未詳

六 一〇一一
わか宿の梅咲たりとつけやらはこといふににたりちりぬとも
よし

十 一八八三
もゝしきの大宮人はいとまあれや梅をかさして
こゝにつとへる

阿倍広庭

八 一四二三
こその春いこしてうゑしわか宿のわかきの梅は
花さきにけり

山部赤人

八 一四二六
わかせこにみせんと思ひし梅の花それとも見えす
雪のふれゝは

大伴村上

八 一四三七
かすみたつかすかの里の梅の花山のあらしにちりこすな
ゆめ

大伴坂上郎女

、十九
風まぜに雪はふれどもみにならぬわぎへの梅を花にちらすな

大伴家持

九二七
雪のうへにてれる月夜に梅の花をりておくらんはしきこもかな

柳　大伴坂上郎女

八十八
うちのほる佐保の川原の青柳は今は春へとなりにけるかも

作者未詳

十八
浅みどりそめかけたりとみるまでに春の柳はもえにけるかも

つばき　同

一六四
こせ山のつらつら椿つらつらにみつゝしのはなこせの春野を

ふぢ　大伴四綱

三三十
藤なみの花はさかりになりにけりならの都をおもほすや君

大伴家持

十九十二
たこの浦の底さへにほふ藤なみをかざしてゆかんみぬ人のため

山吹　厚見王

八七
かはづなく神なび川に影見えて今やさくらん山振の花

桜　山部赤人

二十五
足引の山さくら花日ならべてかくさきたらばいと恋めやも

厚見王

、十一
やどにある桜の花は今もかも松風はやみつちにちるらん

[illegible]　久米郎女

、
よの中も常にしあらねば宿にある桜の花のちれるころかも

播磨娘子

九十七
たゆらきの山のみねのへの桜花さかん春へは君をしのばん

作者未詳

十九
[illegible]梅か[illegible]花の[illegible]

、[illegible]いましちるらん

、あしひきの山の[illegible]梅か花[illegible]光

二十
[illegible]

、春[illegible]春宮の梅の[illegible]

、春[illegible]桜[illegible]

、[illegible]梅[illegible]

桃　　大伴家持

十九
春の苑のくれなゐにほふもゝの花下てる道にいてたつをとめ

躑躅　　作者未詳

七七
山こえてとほつの濱のいはつゝしわかくるまてにふゝみてありまて

卯の花　　[illegible]

八二七
[illegible]

橘　　寧楽宮天皇（聖武）太上天皇御歌

六二二
たちはなはみさへはなさへそのはさへえたにしもふれといやとこはの木

八二七
[illegible]橘[illegible]花のさかりのあらまし[illegible]

遊行女婦（サブルコ）

槿　　作者未詳

十三五
あさかほはあさつゆおひてさくといへと夕かけ（陰カ）にこそさきまさりけれ

萩　　大伴家持

八二一
わかやとのひとむらはきをおもふこにみせすほとほとちらしつるかも

八二二
[illegible]秋のはき[illegible]

[illegible]

十四
ふる門の浅茅かたくよあれなみたも霜のまよひ　まよらし

、、五
まつ虫のふる衣ゆきふれはよなほしほへくもそふる山の奥

、、六
あきかせにも月もそちえんなの成りつきゆる木の葉かはそしちらし

、、七
冬かれて一屋のこゝろたゆくとゆへ志らぬ木かけにさひしき色の住まゐ

竹

奥州　氏末経

五十五
うゑおきしちよくさしこそあらめ家の林ならくひをなれて

萩な

白部兼人

八十五
あきをまつはなれつまんとよそえしのきまきよふもとの雪ふりそつ

之恋

以之末経

十七
実あきあはれの伏見のさとつねとまさけのふるまよもきるぬ

すみれ

白新兼人

八十五
春の野のすみれつむとてむしくれしはまつゝのすみれのかしきるとし

一條内経

なてしこ

以之末経

十廿二
咲きそめてなてしこの花はなへつらはすの秋をまつらしも

大伴旅人

三卅
まきれ草まつ細よはれのかやこのふりまし霧のまよまきれぬ　うらめ

きちかう

以之末経

七三五
あきのゝの花のなかはの野のかすみうつりきくあすはちるそつもそ　きんりとうちそと

あやめ草

大伴家持

八三七
月もきてまつしきなりの夜あやめ草かくらきをいまつゝ荒こら

以之末経

十廿
さくらまれいはまのほれあやめ草かつらまさんなとぬなきまされ

ぬなくは

同

七三〇
まつんゆたかゆくるらまぬなくはみつ沖にしよりくるしきそ

萋　　　　　　　同

四二七
宮のこあきの[illegible]しとゝあきの原[illegible]袖ぬれにけるかも

萩　　　　　　　同

二十三
伊香山のへにさきたる萩見れは君か家なる尾花しおもほゆ

笠金村

八二五
草枕旅行人もゆきふれはにほひぬへくもさける萩かも

丹比國人

八三九
あすかの川ゆきめくる岡の秋萩はけふふる雨にちりかすきなん

作者未詳

十二九
真葛原なひく秋風ふくことにあたの大野の萩の花ちる

秋田かるかりほのやとりにほふまてさける秋萩見れとあかぬかも

我衣すれるにはあらす高松の野へゆきしかは萩のすれるそ

三
二三六
秋[illegible]の秋萩[illegible]

八四二
白露をとらはけぬへしいさこともつゆにきほひて萩のあそひせん

八四七
此ころの暁露にわかやとの萩の下葉はいろつきにけり

大伴家持

廿十四
宮人の袖つけ衣秋萩ににほひよろしき高円の宮

野萩　　　　　　作者未詳

七三之
[illegible]

をみなへし　　　大伴家持

九九
秋の田の穂むき[illegible]

[illegible]　　　　同

廿十五
[illegible]

作者未詳

十四六
かりかねのさむくなきしゆ水くきの岡のくすはゝ色つきにけり

沙弥　石川廣成

八四七
めつらしき君か家なる花すゝきほにいつる秋の過らくをしも

湯原王

三三二
あきはきのちりのまかひによひたてゝなくなる鹿の声の遥けさ

詠萩　作者未詳

七三三
娃よ此をとみしよりまのえもし呼との鹿ら人かりけれ

穂積皇子

八三三
秋萩は咲へくあらし我宿の浅茅か花のちりぬる見れは

寧楽宮御宇天皇　聖武　大御歌

八三六
けさの朝けかりかねさむくきゝしなへ野への浅茅そ色つきにける

詠花　作者未詳

娃よ人と来りまちてやみむとそ秋田をかるゝ見えましを

第五

鶴　　高市黒人

三十九　さくら田へたつなきわたるあゆちかたしほひにけらしたつなきわたる

山部赤人

六十七　わかのうらにしほみちくれはかたをなみあしへをさしてたつなきわたる

作者未詳

七十九　難波かたしほひにたちてみわたせはあはちの嶋にたつわたるみゆ

〃十九　もかり舟おきこきくらし妹かしまかたみの浦にたつかけるみゆ

鷹　　大伴家持

十九十二　やかたをのましろのたかをやとにすゑかきなてみつゝかはくしよしも

鶯　　作者未詳

六三九　春されはをゝりにをゝりうくひすのなくわかしまそやますかよはせ

大伴家持

八十八　うちきらし雪はふりつゝしかすかにわきへのそのに鶯なくも

九四八　春のゝに霞たなひきうらかなし此ゆふかけに鶯なくも

丹比乙麿

八十八　霞たつ野へ（の）のうへのかたにゆきしかは鶯なきつ春になるらし

山部赤人

七十一　あしひきの山谷こえて野つかさに春（今）は鳴らん鶯の声

雉　　大伴家持

八九　春の野にあさるきゝすのつまこひにおのかあたりを人にしれつゝ

呼子鳥　　大伴坂上郎女

〃　よの常にきけはくるしきよふことりこゑなつかしきときにはなりぬ

作者未詳

九十二 瀧のうへのみふねの山ゆあきつべにきなきわたるはたれよぶこ鳥
ほとゝぎす　弓削皇子
二五 いにしへにこふる鳥かもゆづるはのみゐのうへよりなきわたりゆく
額田姫王
いにしへにこふらん鳥はほとゝぎすけだしやなきしわがおもへるごと
志貴皇子
八二三 神なびのいはせの森のほとゝぎすけなしの岡にいつかきなかん
刀理宣令
二二三 もののふのいはせの森のほとゝぎすいまもなかぬか山のとかげに
大伴坂上郎女
二二八 いまもかもおほきの山にほとゝぎすなきとよむらんわれなけれども
沙弥尼等
九二三 かきくらし雨ふる夜を霍公鳥なきてゆくなりあはれその鳥
十六九 旅にして妻恋すらしほとゝぎす神なび山にさよふけてなく
四九 朝霧の八重山こえてほとゝぎすうの花べからなきてこえきぬ
四 ほとゝぎすなく声きくや卯の花のさきちる岡にくずひく妹
四十 さつき山卯の花月夜ほとゝぎすきけどもあかずまたなかんかも
四十三 橘の花ちる里にかよひなば山郭公とよもさんかも
大伴家持
七十二 あをによしならの都はふりぬれどもとほとゝぎすなかずあらなくに
鵜　同
二四五 めひ川のはやき瀬ごとにかゞりさしやそとものをはう川たちけり
鶉　沙弥尼等
八三九 うづらなくふりにし里の秋萩をおもふ人どちあひみつるかも

雁　　　　　　　　　同

七十六
いへさかり旅にしあれは秋風の寒きゆふへに雁なきわたる

九十二
巨椋の入江とよむなりいめ人のふしみか田ゐに雁わたるらし

同十三
さよなかと夜はふけぬらし雁かねの聞ゆる空に月わたるみゆ

十三八
あしへなる荻の葉さやき秋風の吹くるなへに雁なきわたる

おしてる難波ほり江のあしへには雁ねたるかも霜のふらくに

ぬはたまの夜わたる雁はおほゝしくいくよをへてかおのか名をのる

大伴家持

十七十八
けさのあさけ秋風寒しとほつ人雁かきなかん時ちかみかも

中臣清麻呂

廿九
天雲に雁そなくなる高円の萩の下葉はもみちあへんかも

喜の一人　大伴家持

五九
つはめくる時になりぬと雁かねは故郷しのひつゝ雲かくれなく

野　湯原王

三三六
よしのなるなつみの川の川淀にかもそなくなる山かけにして

千鳥　山部赤人

六
ぬはたまの夜のふけゆけはひさきおふる清き川原に千とりしはなく

柿本人麻呂

三十八
あふみの海夕浪千鳥なかなけは心もしのに古おもほゆ

みやことり　作者未詳

ふなきほふほり江の川のみなきはにきゐつゝなくは都鳥かも

鶴　大伴旅人

六六一
ゆのはらになくあしたつはわかことく妹にこふれや
ときわかすなく

湯原王

、三八
秋萩のちりのまかひによひたてて鳴なる鹿のこゑのはるけさ

大伴坂上郎女

、二九
よなはりのゐかひの山にふす鹿の妻よふこゑをきくかともし

作者未詳

十三九
さをしかの妻ととのふとなくこゑのいたらんきはみなひけ萩原

、
かりはきぬ萩はちりぬとさをしかの鳴なるこゑもうらふれにけり

、
山のへにいゆくさつをはおほかれと山にも野にもさをしかなくも

、四
秋萩の咲たる野へのさ牡鹿はちらまくをしみ鳴ゆくものを

大伴家持

二十七
わかをかにさを鹿きなくはつ萩の花つまとひにきなくさをしか

かはづ

按作益人

六三一
思ほえすきませる君をさほ川のかはつきかせてかへしつるかも

作者未詳

十四二
みよしのゝいはもとさらすなく蛙うへもなきけり川をさやけみ

、四八
夕されは蛙なくなるみわ川のきよきせのおとをきかくしよしも

ひくらし

大伴家持

八二五
こもりのみをれはいふせみなくさむといてたちきけはきなくひくらし

作者未詳

十四九
（本ノ二、
萩の花咲たる野へにひくらしのなくなるなへに秋風のふく

蟋蟀

湯原王

八三九
ゆふつくよ心もしのに白露のおくこのにはにこほろきなくも

作者未詳

廿四一
秋風のさむくふくなへ家やとのあさちかもとにこほろきなくも

、
庭草にむらさめふりてこほろきのなくこゑきけは秋つきにけり
秋

ふせころも　東のあらし　年

ガラス使用

一行どり [illegible]

[illegible]

大ヨキ

十レ63

千歌集の上

第六

神　　山部赤人

六三二
かみよゝりよしのゝみやにありかよひたかしらせるは山川をよみ

此哥未詳

九十三
山城のくせのさきさか神よゝりはるははりつゝ秋はちりけり

柿本人麿

一十九
山川もよりてつかふる神なからたきつかふちにふなてせすかも

三十三
大君は神にしませはあまくものいかつちのうへにいほりせるかも

左大臣橘大公諸兄

廿十
ひさかたのあまのとひらきたかちほのたけにあもりしすめろきの

大伴家持

ガラス使用

十八十二
さゝもの[illegible]橋のいや[illegible]
大空[illegible]橋[illegible]
[illegible]橋公

虎（オニ）

十七十二
[illegible]の[illegible]
[illegible]橋[illegible]
藤原[illegible]

[illegible]大御歌

一廿八
[illegible]
[illegible]

三二六
[illegible]の[illegible]
[illegible]原生

六二六
[illegible]

高橋虫麻呂

六二八
[illegible]
多治[illegible]

十九仁
[illegible]国[illegible]
[illegible]

五二九
[illegible]

廿十六
[illegible]

五八
[illegible]

五六八
[illegible]

六三三
うらいねもとらもとせとありとふきさきてきりてなよ　あらうらうしき

九三一
名ひ人のやよわせん霞よ霧かはしまてきてゆく　あめ松嶋もら
以え事件

松

七三四
まつ柱つる源平人はさらあまかり月のくあと作り出るかな
同

海人

六十二
大天のうちまてきくゆあびきもれかさとも霧かるあまの　よしひと居
中納言家持

八十
まつみあらはえのわ春日やさいつ方鴈さくしけのをるし　とりのこまなくよ
石川高あ

八十三
春日ひのくらいのあけあれくはらつもちまさかうちむいさきてらむ
角兵衛居
以え事件

七二三
まつみあ雨の春日やく櫻花をりてこそあちみはつてなよ　さなきれ

九十三
さら浪の志ら山風の海士をはたりをさあけみ袖くつくこゆ

十五十
山のは月のくらけいいさわをにあけおもしひおさなるあ

四十七
うあさの名ち秋あなうとのらつまではまな霧らぬあけ　さとめて

織とり
同

七二三
浪よるしいはかちをり水なみうきねをもてうか月やらうさ

名くさ
同

十五
かよこのくにありておもとをも旅人のくちをみなるいのくく　一もちよ

あさし人
同

七十八
雨の名よ山を出でてめなくはをかさしきねのあさし　とりこの気
小野老於

ねちけ人

十六九
なら山のとみてかしなの子秋まよとさてかうしてねちけ人の　とも

はるのうた　　北畠親房

十二四
いろふかき（て）みねをもちわびつるはなのこゝろ　うきのむすびけるはとあし（よ）

第七　相聞　上

しらぬ人　　中院通勝

四五三
まれにみし野辺の松にしれしらぬ人をまつにふかき心あらは（ら）

きゝなれしことのはかりみをつくし（か）しらぬ人（ゆ）あふもなからも　　北畠親房

五十
おもひ川しらぬわかれをまつかへしこふあへすわかれ

十二九二
玉ほこのみちにはあらぬおもかけを（い）妹まちあへてこふにこゝろも

十二九八
ゆふくれに咲や（は）なきしてしらぬ人ゆへこゝろをこゝろ

二九九
なれてそおもひすまのうらに（て）みちのたちまちてあかつこそ（な）

こゝろ

なく（な）ねのうらのあへ（ふ）なるをまつさへしらぬ人を　二十一　さわれまちかね

志らぬこゝろを　　大伴家持

四四九
むらさきもみんとてかけはのわなつみくさを志てしもか
あらしん
志をまうふな　大伴家持

六三七
橘のにほへるそのにほとゝきすなくと人まちまて
書持宗め

八二九
夏の野のしけみにさける姫ゆりのしらえぬ恋はくるしきものを
大伴坂上郎女

九二二
いそのかみみなと田みはまいてゝも人のこゝろはけくそ

前　於
十二七
あしひきのやまたもるをちのおくかびのしたこかれのみわかこひをらん

十二己
よろつよにふたつなきなの玉つむ花の色もまさらし
ほまづる　門部王

三九九
あさなきてあらしの浦まちこゝろはけふもまたいそぬる妹はこふらく
作者未詳

十五五
うちはれけなのくあれそみちのかゝあゐの花のちるまで
作者未詳

三四一
ほとゝきすなにはなくかも人まちてむなしくすきてこよひ
笠郎女

二十
みすゞかるしなのゝまゆみわかひかはうまひとさひていなといはんかも
久米禅師

みすゞかるしなのゝまゆみひかすしてをはくるわさを
しるといはなくに
石川郎女

あつさゆみひかはまにまによらめとものちのこゝろをしりかてぬかも
さねてこゝろふ
久米禅師

梓弓つらをとりはけひく人はのちのこゝろをしる人そひく
大伴坂上郎女

四二六
山菅のみならぬこと~~に~~をわによせいはれし君はたれとかぬらん
中臣女郎

〃二三
たゞにあひてみてはのみこそたまきはる命にむかふ我恋やまめ
春日王

〃二二
あしひきの山橘の色にいでてかたらひつぎてあふこともあらん
大伴家持

〃二八
千鳥なく佐保の川との清きせを馬うちわたしいつかかよはん
坂上郎女

十五七
さをしかの大野のもときさき河をわたりいつか妹か家にゆきせん

十一九
里人のことよせ妻をあらかきのよそにやわがみんにくからなくに

四二八
こひしなはこひもしねとやたまほこのみちゆく人にことものらなく

〃三三二
しなのなるわたつ山こえみゆくわれの名をまのおとにきかせし人もあらなくに

〃三三六
さゝ波の名にたつ浦によるなみのさゝてさはらであらぬこゆゑよ

〃
うまさけのみわのほふりのいはふすぎてふれしつみかあはんすべもあらん

〃二八
あちかたのしほひのゆたにおもへらはうけらかはなのいろにいでめやも

十二十五
せこの命みむすひもときさけ事もなくやすくいもねよ

ちとりのなくあかつきあしたに
湯原王

四二六
月よみのひかりにきませあしひきの山をへたてゝとほからなくに
大伴坂上郎女

〃二八
たまほこのみちのこさ里をたつねつゝきませる月もへなくなくによ
大伴田村大嬢

〃五七
とほからはわひてもあらむを里とほくありときゝつゝみぬかすへなさ
坂上郎女

十一十六
あら玉のきへか竹垣あみめゆもいもしみえなはわれこひめやも
みせずて
柿本人麿

四十四 みくまのゝ浦のはまゆふもゝへなる心はおもへとたゝにあはぬかも

三方沙弥

二十六 橘のかけふむ道のやちまたに物をそおもふ妹にあはすて

土師水道

四二十一 あ（ち）はやふる神の社にわかゝけしぬさはたはらん妹にあはなくに

丹波大娘子

七百八 うま酒の（を）みわのはふりかいはふ杉てふれしつみか君にあひかたき

作者未詳

十二こ ま[illegible]ねて[illegible]の[illegible]妹にあはむよしもかも

七五五 [illegible]の花さき[illegible]われて我はあれてまちてひさになりぬるも

十二四 か[illegible]山の[illegible]の[illegible]妹[illegible]ぬ

七二九 ふ[illegible]月[illegible]妹[illegible]このころ

七三一 [illegible]の家[illegible]妹か[illegible]あらまし[illegible]

七三三 わきもこにあふよしをなみするかなる不二のたかねのもえつゝかあらん

七七七 みなと入のあしわけをふねさはりおほみ我おもふ君にあはぬころかも

七七八 [illegible]わたる[illegible]小舟[illegible]久しくなりぬあはすして

十二十六 [illegible]の[illegible]の下ゆ[illegible]もあはぬの妹にあはすて

七九 わきもこに（衣）かすかのよしき川よしもあらぬか妹か目をみん

七九二 [illegible]かりも[illegible]の[illegible]なれは[illegible]恋まされ

十四四 さぬらくは玉の緒はかり恋ふらくは不二のたかねのなるさはのこと

あつま

内大臣藤原卿

二十一 われはもややすみこえたりみな人のえかてにすといふやすみこえたり

豊前国娘子

四百七 ゆふやみは道たつたつし月待てゆかせわかせこそのまにもみん

大伴ともお

一五一
あきの日ぞ入まそて　しられて　わすれもとり　ちかしくし　きも新よ　ぬゆ
かにめま

八〇九
秋のつき鈴ゆく庭の　詠なれ見し　月にあつまりけるひら
此君律師

十二三
さつき山花積に　匂ひはまさかりて　時よ　あつまさこそ

一六二
あめるにも　よみけてなゆき　後のくわゆき　かりへの茶の
おつくし
白き〳〵の袖ふれて　よわわれこま　乱るかも　時なき

一
まゆねの茎こぼれて　玉のし謝まりし　へ人をあひこるも

一三一
はるの夢のたぶの下ぞ　寄せあれて　あつしてゆ夢　故にまよし

十二六二
さみしきのそこの下ぞ　なをやな　妹の来ぬも　この玉わしを

十三六
世すまし人をさそて　ねをまつのるみまされし　恨ねるなそて
ならし　ねね

なりく

九二〇
其国のははれいわかく　玉しのことよ　いつわきれてはるはまくく
和氣大首

十二四
しきなみのやま日比衣　あされさるなかれまきれ　ぬよし
此君律師

一二二
いあるみの花この山なると　いきも川はさりしそこと　ふるをみるな
君か吾

一九
大君の御笠ほあつてみ高まる　わかつされしてふてなさけるも

十二十四
大君の玉日にしあら比之庭衣　なされて　もとまてしかめつしも

十八二七
しきなみいとつるふもの　を修るつみのなみれつしてよ
大伴家持
松本のあめも

八四六
はるくの内田もとされ　みでこうしんも　まつして　衣月　松の意
妹つり
同
此君律師

七九 妹らかり我かよひ路の志のすゝき我しかよはゝなひけ志の原
九二七 初瀬川ゆふわたりきてわきもこかいへのかなとはちかつきにけり
十一七 とまれのこはしみちをふるわれとかちまかくなをおもはれ
はこ一 妹か門ゆきすきかねつひさかたの雨もふらぬかそをよしにせん
十二九之 あさちふのちふにあしふみこゝろくみわかおもふこらか家のあたりみつ
秋さう聞　同
十四十七 かみつけのさのゝ舟橋とりはなしおやはさくれとわはさかるかへ
ゑさ志くゝふ原　柿本人麻呂
四十て をとめらか袖ふる山のみつかきの久しき時ゆおもひきわれは
大伴家持
、五八 あらたしきとしはかはるともかくてこふれとおなしかも妹かあひかき
作者未詳

十六之 あまをふねはつせの山にふる雪のけなかくこひし君かおとそする
相聞歌　笠郎女
三巴一 みちのくのまのゝかやはらとをけれとおもかけにしてみゆといふものを
て三三 ゆふされはものおもひまさる見し人のことゝふすかたおもかけにして
大伴家持
、五之 かくはかりおもひしをとおもはまつ目え以かにせまし人国之たえて
うとあらひ　舎人皇子
二十五 ますらをやかたこひせんとなけゝともしこのますらを猶恋にけり
門部王
四二一 おうの海のかはらのちとりなかなけはわかさほ川のおもほゆらくに
大伴家持
、に八 忘れなくあらん人をなにゝもひまなし杉なりかさひくあるら

八八九
ますらをとおもへるわれをかくはかりみつれにみつれかたもひをせん

大伴旅人

八二九
橘の花ちる里のほとゝきすかたこひしつゝなく日しそおほき

佐伯赤麻呂

十四二
いせのあまの朝な夕なにかつくちふあはひのかひのかたもひにして

大伴坂上郎女

十八七
か[illegible]人をまつ

大津皇子

二十七
あしひきの山のしつくに妹まつとわれたちぬれぬ山のしつくに

石川郎女

あをまつと君かぬれけんあしひきの山のしつくにならましものを

額田女王

四八八
君まつとわかこひをれはわかやとのすたれうこかし秋の風ふく

大伴坂上郎女

六六一
こひこひてあへるときたにうるはしきことつくしてよなかくとおもはゝ

大伴家持

な[illegible]

小治田廣耳

八二九
ほとゝきすなくをのへの卯の花のうきことあれや君かきまさぬ

沙弥満誓

五二二
よしの川七瀬の淀[illegible]

十二四
[illegible]

五二
秋萩の[illegible]

橘を[illegible]

、五六
蓬菜のやとりし　是此秋も（萩）はな咲て　ちりすきにけり　見すてぬ（まち）かねて

、
我宿の萩咲にけり　ちらぬまに　早来て見へし　ならの里人

十一に
君かため世はへことさらに　我かもろ袖に　月を待や　きかへしと　恋つゝそをる

、二九
み神さて詠打わひ　見まつとおもへし　あひそめにし　月をこひわたるかな

、三八
あちの河むすさかれ　入江のあそひ　松あそとて　ことふきて　ひとりのこ

、四十
その色のさとも愛したもとの　うしろかけてちるかれ　妹をたえこそ

十二十八
かしきのうちより　出る月　いまそひて　妹にたくひまれて

十二十も
枝つきし　流をもて　我をゆかあとさし　見まくさん　花の志なく

十六十二
かゝるのさのころ　寺とせ　たなれやし　あれきみ寺もみ　ここしさまとて

、二八
わかきゝに　かけてないひそ　かりこもの　みたれておもふ　とそなれ
きみかたゝかそ　大伴像見

にゝ六
春日野に　朝ゐる雲の　しくしくに　我は恋ます　月に日に
けに

大伴家持

にゝこ
あひ見ては　しはしも恋は　なきんかと　思へといよゝ　恋まさりけり

作者未詳

十六二
さゝおとふるはけれ　ふり出てし　あまたふりても　まきれんとて　此夜あらめ

十二十六
もろともに　かけおきてみし　かけまれはつきて　見くしのさえかな

大伴像見

にゝ六
一瀬には　千たひさはらひ　ゆく水の　のちにもあはん　いまならすとも

大伴坂上大嬢

、五二
かにかくに　人はいふとも　わかさちの　のちせのやまの　のちもあはんきみ

大伴家持

、
のちせやま　のちもあはんと　おもへこそ　しぬへきものを　けふまてもあれ

紀女郎

ガラス使用

一五、
玉のをゝあはをによりてむすへらはありてのちにも
あはさらめやも
作者未詳
九二七
たらちねの母かこゝろのうとなれハ年のをもくたれさちたのまんや
十一三六
塔河原へなかこの末はなれ浦のくれさふらてはらひんかも
十二九
神かきにかゝるよみゆく水のみをまくるさゝハみちもりをのあ
おもひしまね　大伴坂上郎女
四四、
うつくしとわかおもふこゝろはや（足）川のせきにせくともなほやくつれん
大伴坂上大嬢
一五二
世の中くるしき物にありけらく恋にあへすてしぬへき思へハ
作者未詳
十五七
長月のありあけの月夜ありつゝも君かきまさは我恋んやも
十一二八
玉ちはふ神も吾をハうつてこそしゑや命乃をしけくもなし

一四二
かたいともてぬきたる玉のをゝよはみみたれやしなん人のしるへく
おもひやまず　大伴家持
十四二
一重のみ妹のむすはん帯をすらみへむすふへく我身ハなりぬ
作者未詳
十二九
夕月夜あかつきやみの朝かけに我身ハなりぬなをおもひかねに
あて人をこふ　笠女郎
一三二
伊勢の海のいそもとゝろによするなみかしこき人に恋わたるかも
たけなさき人をこふか　三方沙弥
二十六
たけはぬれたかねハ長き妹か髪このころみぬにかき入れつらんか
こゝく　生羽之女
一
人みなハ今ハなかしとたけといへと君かみし髪みたれたりとも
金明軍（コンメイグン）

三四一 しめゆひてわかさためてしすみのえのはまの小松はのちもわか松

大伴駿河麻呂

、、三 春霞かすかのさとのうゑこなきなへなりといひしえはさしにけん

作者未詳

十四八 うちひさすみやちを人はみちゆけとわかおもふきみはたゝひとりのみ

石川郎女

二十八 ふりにしおみなにしてやかくはかり恋にしつまんたわらはのこと

大伴家持

に二五 うつせみのよはつねなしとしるものをあきかせさむみしのひつるかも

（大伴）坂上郎女

、二六 くろかみにしろかみましりおゆるまてかゝる恋にはいまたあはなくに

沙弥満誓

に二八 ぬはたまのくろかみかはりしらけてもいたき恋にはあふ時ありけり

作者未詳

、三六 わかたもとまかんとおもはんますらをはをちみつもとめしらかおひにけり

こゝく

佐伯赤麻呂

しろかみのおふることはおもはすをちみつはかにもかくにももとめてゆかん

作者未詳

十五 いそのかみふるの神杉神さひて恋をもあれはさらにするかも

第八　相聞下

妹　近江大津宮天皇（天智）大御製

二 廿 妹か家もつきてみましを大和なる大しまのねに家もあらましを

こたへ歌　鏡女王

秋山の木の下かくり行水のわれこそまさめみおもひよりは

柿本人麿

〻 卅 秋山におつるもみちはしはらくはなちりみたれそ妹かあたりみん

〻 青駒のあかきをはやみくもゐにそ妹かあたりをすきてきにける

山上憶良

三 三三一 おくらゝは今はまからん子なくらんそれその母も吾をまつらんそ

大伴百代

四 二六 恋しなんのちは何せんいける日のためこそ妹をみまくほりすれ

大伴像見

四 四一 いそのかみふるともあめにつゝまめや妹にあはんといひてしものを

作者未詳

七 五一 とほるへくあめはなふりそわきもこかかたみの衣[illegible]

十一 七 [illegible]妹か[illegible]

四 三七 あきの田のほ田の[illegible]

〻 二九 妹か[illegible]夕やみの木の[illegible]月[illegible]

十二 七 あらたまの[illegible]衣の[illegible]妹[illegible]

〻 二十 [illegible]

〻 三五 [illegible]妹を[illegible]

十七 二三 あきかせのさむき[illegible]妹[illegible]

大納言大伴卿（御行）

人妻

四十八
榊にも手はふるといふをうつたへに人妻といへはふれぬものかも
せうし　　小侍従

十五
ますらをやかたこひせんとなけくともしこのますらをなを恋にけり

十一十
わかせこにこふれはくるしいとまあらはひろひてゆかん恋わすれ貝

二九
わかせこのふりさけみつゝなけくらんきよき月夜に
くもなたなひき

十九
うちひさす宮のわかせはやまとめのひさまくことにわれを
わすらすな

わすれめや　　讀人知らす

二十五
皆ひとをねよとのかねはうつなれと
君をしおもへはいねかてぬかも

笠郎女

三十一
おく山のいはもと菅をねふかめてむすひし心わすれかねつも

柿本人丸

四十五
夏野ゆくをしかのつのゝつかのまも妹か心をわすれておもへや

、十七
年にあふわかもえみ塩のうへちかくなりにけれし命をしれと

山口女王

、三三
あしへよりみちくる塩のいやましにおもへか君かわすれかねつる

大伴家持

、五一
さくはなはうつろふときありあしひきの山すけのねしなかくは
ありけり

[illegible]

十二五
から衣うちまて人は秋の夜のすからさむさにもみちのこゑのちを

十二三
秋萩のえたもとをゝにおく露のけなはけぬとも
色にいてめやも

大伴坂上郎女

四十一
きみのこゝろ見かはいかにふかせとかくてとふことはとのなく
さて

大伴家持

ことのこゝろをはもあひしとおもふこゝろはまさきのめて
あひさへみえこりも

ガラス使用

十二乙
まれゆくみかくゑんたらん垣つゝき古里の妹はいへらにあるらん　読人不知

十九十五
あひおもひきかはらん世とあさしもなきはゝの人のよをまて　大伴家持

うきかりぬ　寧楽宮天皇　或聖武天皇

にち
赤駒のこゆるませのしめゆひし妹かこゝろはうたかひもなし

こゝろつくすな　海上女王

梓弓つまひく夜音のとほとにもきみかみゆきをきかくしよしも

いうそか　大伴家持

はもに
いつはりもにつきてそするうつしくもまことわきもこ我にこひめや

読人不知

十二之八
あさちはらかりしめさしてむなこともよせてし君かことをしまたん

十二二に
あさちはら小野にしめゆふむなこともあはんときこせ恋のなくさに

かくさは　大伴坂上郎女

にに
いふことのかしこき国そくれなゐの色にないてそおもひしぬとも

まちをとこきゝそのこしもよるもれとおもひしてくるしかれ

読人不知

十五二
さをしかの朝ふす小野の草わかみかくろひかねて人にしらるな

二二六
ますかゝみあふ坂山のはつもみちはうつろひゆくを見るそかなしき

十一六
こひしさのれなりつきかへやうつしゝ母とともうつろおもはし

四十六
みなせこの名はちゝしらすもさうは爺はまさへまさむれしなみ

二二二
あらくおもへはふる山のしけきにてそなたのなはおもはし

二二九
芦垣の中のにこ草にこよかに我とゑまして人にしらるな

二二七
紅のこそめ衣をしたにきは人のみらくにゝほひいてんかも

人にしらるゝ　同
十五之　はましらの岸のそのふしいちしろくかくろこなのよ人のしられぬ
中言　大伴坂上郎女
四二一　なをとあを人そさくなるいてわかきみ人の中ことききこすなゆめ
大伴家持
四、二　けたしくも人の中ことききかせかもこゝたくまてと君かきまさぬ
人言　但馬皇女
二十五　人ことをしけみこちたみおのかよにいまたわたらぬあさ川わたる
八代女王
四三五　君によりことのしけきをふるさとのあすかの川にみそきしにゆく
或云　たつたこえみつのはまへ
丹波大女娘子
、四二八　垣ほなす人ことききてわかせこかこゝろゆたひあはぬこのころ
作者未詳
十三　人ことは夏野の草のしけくとも妹とわれとしたつさはりねは
あふみのうみおきつしま山おくまけてわかもふいもかことのしけけく
笠郎女
四二一　うつせみの人目をしけみいしはしのまちかき君にこひわたるかも
大伴家持
、四五六　人目おほみあはさるのみそこゝろさへ妹をわすれてわかもはなくに
作者未詳
十一四　あ[illegible]の[illegible]橋のとをまて[illegible]とも人目をおほみ[illegible]
なをとくしも
大伴坂上大嬢
四五一　いきてあらは見まくもしらすなにしかもしなむよ妹といめにみえつる

作者未詳
十六二
このねらかとみ山かくれいちしろくこひハ妹か名人しらんかも
もしまあ　山にめさ

四三二
つゝましき名をし立てゝ家かれ見すまあはすて年のへぬれハ

大伴家持
、五一
今しはし名のをしけくも我はなし妹によりてハ千たひたつとも

作者未詳
十七
春山のあしひの花のにくからぬ君にハしゑやよそるともよし

十二九
ちはやふる神のいかきもこえぬへし今ハわか名のをしけくもなし

大伴家持
四三三
なかなかにもたもあらましをなにすとかあひ見そめけんとけさらまくに

大伴坂上郎女
、三三に
はしめよりなかくいひつゝたのめすハかゝる思ひにあはましものか

作者未詳
十七七
梓弓ひきてゆるさすあらませハかゝる恋にハあはさらましを

形見
湯原王
四三七
あかころもかたみにまつるしきたへの枕をさけすまきてさねませ

作者未詳
、
わかせこかかたみの衣つまとひにわか身ハさけしことゝハすとも

大伴家持
、五二
わきもこかかたみの衣下にきてたゝにあふまてハわれぬかめやも

作者未詳
十二十に
年のへハ見つゝしのへと妹かいひし衣のぬひめ見れはかなしも

十五三に
あはん日のかたみにせよとたはやめの思ひみたれてぬへる衣そ

なみた、　大伴三依

四百　てらす日をやみにみなしてなく涙衣ぬらしつほす人なしに

大伴旅人

六二九　ますらをとおもへるわれやみつくきのみつきのうへに涙のこはん

作者未詳

十二八　[illegible]の宿[illegible]衣[illegible]ひる時もなし

四二七　[illegible]のふるさと[illegible]て露は[illegible]袖ひあや恋は[illegible]して

うらむ　同

十二九　[illegible]恋も[illegible]やも見し人の[illegible]人[illegible]ことを[illegible]つけ[illegible]む

三一九　[illegible]の入[illegible]のこえを[illegible]こゝろ見れを[illegible]恋[illegible]かひ[illegible]れ

[illegible]　同

十二一　[illegible]つくてとふ[illegible]の[illegible]し[illegible]恋し[illegible]

十二二七　かもすらもおの妻とちあさりしておくるゝほとにこふといふものを

ひとりぬる　紀皇女

三四十　かるの池のうらはゆきめくる鴨すらも玉ものうへにひとりねなくに

大伴坂上郎女

四五七　春日山霞たなひき心くゝてれる月夜にひとりかもねん

作者未詳

十二三　[illegible]月のさし[illegible]燭[illegible]あれ[illegible]あしかねて

一六六　足引の山のあらしはふかねとも君なき宵はかねてさむしも

十一九三　妹か袖わかれし日より白妙の衣かたしき恋つゝそぬる

一四五　おもへともおもひもかねつ足引の山鳥の尾の長き此夜を

、あし引の山とりの尾のしたり尾のなかなかし夜をひとりかもねん

十二二四　[illegible]のあさ[illegible]の[illegible]ひとりねて[illegible]ぬるよ[illegible]

ガラス使用

萩

四二二
ほとゝきすちかまとかといあすゝら何のさかりにも見ゝは
あらんかめ
笠郎女

一五二
萩のあひたくらしかねくさもなからへてまちこそわれとも
なほしそれねい
大伴家持

夕されてやれあきとまけてちまふらんいゑすまあひみなるらんとふ人を

一五三
いまさらに見ゝいゝてあるめかくはゝゝみえもてあるいゑてきねとら
あり
作者未詳

十一二八
あきかせらゝにはへのきあのあさちあひてぬれはおほ
えたり
作者未詳

十二九
うつしとおりふるまゝえをいそきてわかてさく藤よなきふさふし
さ
中臣宅守

十五二二
おもひつゝねれはうちとけぬいもの一夜もおちすゆめにしゆ
いねのそし
笠郎女

四二二
うち人をねよみのゝねいらつなれと見えしまへいねえてめ
うも
作者未詳

十一九一
大原のふりにし里に妹をおきて我いねかねつゆめにみえこそ

十二六
らあみたもれゆふけの人のねるらんいねもやよるなん

二ら
まきしくはまてあすみみをもとの川やまてねきるすまゝる
うも

十四二六
まへさく萩の浦をふみ海やさまよさぬるわなきこゝろせて
りへ
さとくにぬれへる
播磨娘子

九二七
我なれいあまつかさん様なるつゆのまとしもとなくと
そしも
作者未詳

十二三五
いましつのきつまりは茅をむすひおれとつくて見まれ
ゆきし
哉ゑいましつのさみつの茅を

十四三九
まきしまのやすれの国よ人ふるあまさとしまて
はなれなきかん

上　大伴皇子

二十七
大舟のつもりらゝゝはおちこんといふ月はしりにきりてよのふころねし
　大伴家持

四五一
月夜よし川はさやけしゆふ〳〵ひあそひてゆかくをと
　川ちゝ未済　ほとゝ

十三七
こ月このなゆきらしまうらかなしき妹にあひんと都まこひつる

一九之
ゆふすまうらさひしきみゆるらねひの時あさ夫をこひとか
　おもふらん

十二九
月夜よみ門に出てあしうらしてゆく時さへや妹にあはさらん

十四七
むなし姥にらくへうらやさまきてのこみちぬ君の名はたゝすら
　ちのうれ　同

十八
水のうへにかすかくこときわか命妹にあはんとうけひつるかも

ありつゝもえはつゆく流のほかんとおもひて　おちて
　磐之媛

一十二
旅人のやとりせんのに霜ふらはわか子はくゝめあまのたつむれ
　ゑや

一四二
住のえの浜にふるをとこひみなきかとも　あそひも

十四六
けふ〳〵のこゝろの滝みいえはえの君とゆつきんにもらし
　神のちから　大伴ぬ代

四二八
松かねを枕とふといへる君のなからのなの森の社
　神をといみな　長屋王
　ともさん

三二八
さほるさてなみかもけまおくあゆき妹を見られまし
　笠女郎　あれん　しあとそ

十三二
天地の神しゝたまわなくことにおもふ君はあけてとつまひあ
　くらし
　雅澄奏侍者皇后御製

二八
かくまかりそつあまいとらの上かねしまりとて
　たなかりし柿主

石川郎女

一二六
みやびをと我はきけるを宿かさず我をかへせりおそのみやびを

うらゝへ　　大伴田主

、一二七
みやびをに我はありけり宿かさずかへしゝ我ぞみやびをにはある

山部赤人

三二五
あすか川川淀さらずたつ霧の思ひすぐべき恋ならなくに

大伴坂上郎女

、四〇一
山もりのありけるしらにその山にしめゆひたてゝゆひのはぢしつ

大伴駿河麿

、
山もりはけだしありともわぎもこがゆひけむしめを人とかめやも

大伴坂上郎女

四十八
ゆふたゝみ手にとりもちて久方のよるのまもりにこもりなんかも

、五二六
千鳥なくさほの川瀬のさゞれ波やむ時もなしわがこふらくは

、七六〇
うちわたす竹田の原になくたづのまなく時なしわがこふらくは

廣河女王

、六九四
恋草を力車に七車つみてこふらくわが心から

丹波大娘子

、七一一
鴨とりのあそぶ此池に木のはおちてうきたる心わがもはなくに

大伴田村大嬢

一五〇六
ふるさとのならしの岡のほとゝぎすことつけやりしいかにつげきや

巫部麻蘇娘子

十六三
あきの田のほ田の刈ばかゝよりあはゞそこもか人のわをことなさむ

平群郎女

三九三二
須磨人の海へ常さらずやく塩のからき恋をもあれはするかも

以上五十首

七三四 白菅のまのゝ萩原心ゆもおもはぬ君かころもにすりぬ

三八 廣瀬川袖つくはかり浅きをやこゝろふかめてわかおもへらん

ナナ二 春されはもゝの花さきにみえまさりとも家はこゝろん事かあふらん

かはつなくしはなく春の咲花の根のしなくさ恋てなかむるうつろふも

五七 宮こひしなみえ浦ふれはさそれは秋風吹て月うつりぬる

五八 ちはやふるいはふ社のもみちはもしめなはこえてちるといふものを

十六七 さゝの葉はみ山もさやにさやけともうわれとも

四八 大舟のかとりの海にいかりおろしいかなる人かものおもはさらん

十七二 ちの人のみなよ秋の夜をなかしといへとつもりにしこひをつくせはみしかゝりけり

一二七 宮木ひくいつみのそまにたつ民のやむ時もなくこひわたるかも

住の江のはまあひきいみちはのをかうのれゆかん恋つあかすゝ

九八 紅のきぬひくいとをなかにて家やのうらん見やさかさん

あすよりやかはのやまかつのいたひつきにいくよかもちてあらん恋つゝ

秋ならはまちつる人のいへとも人のんまゝしあへあらも

あすかゝは秋もふくまてしよしきたつよろへかふくかなのよ

三三三 いすゝ川あさてまつる人いたくしみと間さん岸もほえぬ

みたらし川せゝもやまとむすひあそてはるをまつ妹と間えも

十一六七 ことさわる挙ありつにより浪のゆふくれてあまのふくる

しのあをれ猿やまてやま里のかうきこゑをあはれとも

十二十七 ことしと人のあしのけをみさり時を今そすれとふじとれ

二十八 たちかくしのあさあしひきつとあつもめんりわれしらすまて

二十 逢ひいてゝまへなきはけてあやしのたくゐもしらすそを思

二三五 ぬ川くさの花の岸をふきわたるちりもそこそうつろふ

大埼のありそのわたりはふくすのゆくへもなくや恋わたりなん

二十八
さひのくまひのくま川に駒とめて馬にみつかへわれよそにみん

三十六
衣手のまわかの浦のまなこちのまなく時なしわか恋ふらくは

三十七
[illegible]川の[illegible]なき

二十九
[illegible]とかくてめやし

三十
いねつけはかかるあかてをこよひもかとののわくこかとりてなけかん

三十五
あさかやまかけさへみゆる山の井の浅き心をわか思はなくに

第九
わかれ

大伯皇女

二十三
我せこを大和へやると小夜ふけて暁露にわかたちぬれし

二人ゆけと行過かたき秋山をいかにか君かひとりこえなん

石川郎女

二十一
吾をまつと君かぬれけんあしひきの山のしつくにならましものを

高市黒人

三十九
妹もあれも一つなるかも三河なる二見の道ゆわかれかねつる

黒人妻

みかはの二見のみちゆわかれなはわかせもわれもひとりかもゆかん

筑紫娘子

三十八
凡ならはかもかもせんをかしこみとふりたき袖をしのひてあるかも

麻田陽春

四二八
大和へに君かたつ日のちかつけは野にたつ鹿もとよみてそなく

紀郎女

〻三八
しろたへの袖わかるへき日をちかみ心にむせひねのみしなかゆ

安倍虫麻呂

〻四一
むかひゐてみれともあかぬわきもこにたちわかれゆかんたつきしらすも

作者未詳

九三五
あしのへに[illegible]てかりかねのきこえゆくなへしなかふ君ぬらさん

十五に
むこの浦の入江のすとりはくゝもる君をはなれて恋にしぬへし

ゝゝゝ

同

〻〻
大船に妹のるものにあらませははくゝみもちてゆかましものを

〻五
妹とありし時はあれとも別れては衣手さむきものにそありける

〻六
うなはらにうきねせん夜はおきつかせいたくなふきそ妹もあらなくに

〻〻七
大伴のみつに舟のりこきてゝはいつれの島にいほりせんわれ

[illegible]時のまに命[illegible]

多治土作

九三六
住のえにいつくはふりか神ことゝゆくともくとも舟ははやけん

大伴家持

〻三八
[illegible]

川原虫麻呂

六十
父母をいはひてまたねつくしなる水つく白玉とりてくるまて

防人之中之母

〻十之
[illegible]天雲の[illegible]

ゝゝゝ

日本紀之中

ちゝはゝをわかれてとほくきぬれは旅のそらはるかなる
やまとくわんなる

今奉部与曽布
七九
けふよりはかへりみなくて大君のしこのみたてと出たつわれは

日本よみてちへきえあかなのまゝ

旅
額田姫王
二十
にきたつに船のりせんと月まてはしほもかなひぬ今はこきいてな

柿本人麻呂
三十
さゝのはもこゝろさひしみの山をこえくるもやまとのこえぬ国を思ひ

三十二
こゝろしてあやしいうこ白妙しぬるなりしをとこえて来すはなり

山上憶良
一〇七
いさこともはやく大和へ大伴のみつの浜松まちこひぬらん

志貴皇子
あしへゆく鴨のはかひに霜ふるゝ（りて）寒きゆふへは大和し思ほゆ

置始東人
大伴のたかしのはまの松かねをまくらきてぬれといへしのはゆ

高安大島
二十七
旅にしてものこひしきに鴫のなくこゑもきこえさりせはこひてしなまし

身人部王
一〇八
大伴のみつの浜なるわすれ貝家なる妹をわすれておもへや

高市黒人
大和にはなきてかくらんよふこ（く）とりきさの中山よひそこゆなる

三十九
旅にしてもの恋しきに山もとのあけのそほ船沖にこ（ぎ）くみゆ

いそゝまつはのやまとせんうまのかつねのふかまのこのゆれなまし
忍坂部乙麿

一九七
やとりせしいほのねやはあれんなれこのもの[illegible]よりなつかしや
[illegible]

一九八
まきこしもこゝろもしらぬ濱風にたへぬ秋なきものを松の梢にふくらむゆめ
[illegible]

うち山路にゆきくれて旅ねの夜半の[illegible]妹とあかぬなれよ
[illegible]

二〇〇
旅ねしてあはれけなるやひとりねの枕旅のあはれはきえのたにも[illegible]
[illegible]

二〇一
たかやくのきつね乃せをもわれなく[illegible]ふく[illegible]
柳[illegible]人麻呂

あつまぢのぬまの[illegible]乃[illegible]妹[illegible]ひし[illegible]
[illegible]

[illegible]の[illegible]の浦よ浪[illegible]あまの[illegible]旅[illegible]

二〇三
あつちうはかなき[illegible]ちらさ[illegible]あまりの[illegible]
[illegible]

二〇四
[illegible]の海[illegible]
弁[illegible]

二〇五
[illegible]山ゆきくれゆきて[illegible]川[illegible]
[illegible]

二〇六
秋風の[illegible]ゆん[illegible]あ[illegible]と
[illegible]

二〇七
関[illegible]て[illegible]て妹の手枕[illegible]旅[illegible]を
[illegible]

二〇八
[illegible]の[illegible]年の[illegible]
[illegible]

[illegible]も[illegible]人[illegible]
[illegible]

ガラス使用

一三八 みよしのゝ山のあらしのさむけくにはたやこよひもわかひとりねん

九九 や[illegible]ゆくか[illegible]

十 [illegible]妹に[illegible]の浦に[illegible]袖[illegible]ねん

十五三六 あ[illegible]秋萩の花を[illegible]の月に

十二三八 鈴鹿川やそせ[illegible]たれゆゑかよこえにこえん妻もあらなくに

十二二六 [illegible]て妹か[illegible]

十七三 夏そひく海上のかたのおきつすに舟はとゝめんさよふけにけり

十五七 月よみのひかりをきよみ神島のいそみの浦ゆ舟出すわれは

八九 夕されは秋風さむしわきもこかときあらひ衣ゆきてはやきん

八三 おきつ浪たかくたつ日にあへりきと都の人はきゝてけんかも

秋の野をにほはす萩はさけれともみるしるしなし旅にしあれは

八二 大舟にまかちしゝぬき時まつと我は思へと月そへにける

かへりきてみんとおもひし我宿の秋萩すゝきちりにけんかも

十七二 たらし姫みふねはてけん松浦の海妹かまつへき月はへにつゝ

二六 天さかるひなにも月はてれゝとも妹そとほくは別来にける

二九 [illegible]妹もあらなくに

十七七 いそことにあまのつり舟はてにけり我舟はてんいそのしらなく

あはちしまとわたる舟のかちまにも我はわすれす家をしそ思ふ

玉はやすむこのわたりに天つたふ日のくれゆけは家をしそおもふ

八 大海のおくかもしらすゆく我をいつきまさんととひしこらはも

十五十六 大君のみことかしこみ大舟のゆきのまにまにやとりするかも 壱岐宅麻呂

お
大蔵人麻呂

十九七 大夫のこゝろ[illegible]

刑部直三野

〃九二
もゝくまのみちはきにしをまたさらにやそしますきて別れかゆかん

物部古麿

〃九三
わかつまもゑにかきとらんいつまもか旅ゆくあれはみつゝしのはん

占部廣方

〃九七
橘のしたふくかせのかくはしきつくはの山をこひすあらめかも

大田部荒耳

〃九九
天地の神をいのりてさつやぬき筑紫の島をさしてゆく我は

大田部三成

〃九の
なにはとをこきてゝみれは神さふるいこまたかねにくもそたなひく

旅なる人をおもふ　當麻真人麻呂之妻

一九
わかせこはいつくゆくらんおきつものなはりの山をけふかこゆらん

誉謝女王

一九六
なかるゝ妻吹風のさむきよにわかせのきみはひとりかぬらん

碁檀越之妻

四十七
神風のいせの濱荻をりふせて旅ねやすらんあらきはまへに

黒人之妻

三九
しら菅のまのゝ萩原ゆくさくさ君こそみらめまのゝはきはら

藤原宇合

九十六
山科の石田の小野のはゝそ原見つゝや君か山ちこゆらん

作者未詳

〃九
あさもよしきへゆく君かまつち山こゆらんけふそ雨なふりそね

〃
おくれゐてわかこふれは白雲のたなひく山をけふかこゆらん

〃十六
たかしまのあとの湊をこきすきて塩津菅浦今かゆくらん

一九六 ふ[illegible]れのこえ[illegible]恋んまてあ[illegible]山をこえ[illegible]なく

おくれゐてこ[illegible]恋んいなさこ[illegible]の秋[illegible]いなんとゆき[illegible]よ

十七 十七六 梅のはなちるをも春[illegible]さいりまふ[illegible]旅ゆく[illegible]いはせん

十二オ九 [illegible]れは[illegible]かくれゆく旅

いさゝ山[illegible]ふらんさませいろさきのうねひの[illegible]部ん

旅の[illegible]の[illegible]まもまつあけらぬあられと[illegible]をいそくなみまなし

まくら[illegible]さのしらしいまわよりことさ[illegible]いさ[illegible]月[illegible]

一四一 あしひきのかた山きしのもちゆるん[illegible]をれてうけぬ[illegible]

あのをのうしんやうらかけうきてん舟[illegible]れてをらん

十三オ六 [illegible]はせふかこ[illegible]せとの旅ゆく[illegible]衣きてぬまんかも

第十 羇旅　　　　中皇女命

六 たまきはるうちのおほのにこまなめて
　　朝ふますらんその草ふけ野

柿本人麿

一九二 [illegible]のみ[illegible]の一つなめて[illegible]わ[illegible]志、時[illegible]

山部赤人

三六七 あ[illegible]まの[illegible]みのゝ人[illegible]みだれ[illegible]ゆ

大伴家持

十七 かさゝきの[illegible]月[illegible]

宴　　大網人主

三〇四 須磨のあまの塩やききぬの藤衣
　　まとほにしあれはいまたきなれす

阿倍仲麿

ガラス使用

八百二
秋の露にたちまちきえし きえてうしくも さらにあはれなり
大伴村上

八百三
よし月を あかしと人に何とかこれと あふもあはれ あはなくぬこころ
菅原是善

八百三
名におへてなのてつ おもはん あるへしと見ゆきりし こころにはかなる
葛岡人

八百四
山田寺の 松かをの川にやなきそゐも 見えかくれん ことわりまれもやも
皇太后宮 大炊王 清らか

たまたまに うき世のわかれ やとこの露と
月にも寄る涙はとまるなり
人々の結ぶの言さへて見らるる道の行
さるいとこそしの月
そらしに うき世の行くぬれ 言ひてて
時鳥し ~~[illegible]~~ [illegible]
月し
一五の二くはの第さへて心の道
[illegible] 松の道

いそんなきせんもとまことめとかまとまなもかへ涙あそらし
、中あるは人とあらはる涙の目になりてもの涙にさそみなん
、あれこそしらましすれ涙あまねく人をとくきれそ さるるかも哉
八三三
、あさましかきまさとふとも一つかみにこれる涙はあはれならぬや
、よそひの涙をかくして涙のそて んそやあはれ あまさへあやしと
、世の中のあきひのさかりぶし くちるひかるさまそ あかめくらし
、この世をすぐるかれしくあるいかんよまいむしまかるとも氷をなすなん
、いきる人のひとまま きぬまものなれけ世すゝまかいとものまことも あはれ

ガラス使用　挟み込み物

八四二
秋の野の花さきちるをさそひし　すすきうしろもちらであるらし
大伴村上

八四三
春日山あはれしと何とこれとあるものか実はあまりにしぬこのき
董氏之名

八四四
ことならでなでつけさんあかつきも見ずまして　うきよかさねん
高岡人

八四五
小田なる池おきなの川は世をそねむとも見すかなしからんことをつまんやも
皇太子　大炊王御歌

擇称多見え候へ

いそ人をせんもくき
中々に人とあらずは酒壺になりにてしかも酒にしみなん
あなみにくさかしらをすと酒のまぬ人をよく見ればさるにかも似る
三三
あたひなきたからといふとも一つきのにごれる酒にあにまさらめや
よるひかるたまといふとも酒のみてこころをやるにあにしかめやも
世の中のあそびの道にかなへるはゑひなきするにありぬべからし
この世にしたのしくあらばこむ世には虫に鳥にも我はなりなん
いける人つひにもしぬるものなれは此世なるまはたのしくもあられ

ガラス使用　挟み込み物

もだしゐてさかしらするは酒のみてゑひなきするになほしかずけり

又　同

三四六
夜ひかるたまといふとも酒のみて心をやるにあにしかめやも

丹生女王

いにしへの人のたまへせるきびの酒やまはすべなしぬきすたまはらん

[illegible]ふれしに　[illegible]

四六二
今よりは秋風さむくふきなんをいかにかひとりながき夜をねむ

舎人等慟傷歌

一七一
たかひかるわがひのみこのよろづよに国しらさましまのみやはも

一八四
ひむかしのたぎのみかどにさもらへどきのふもけふもめすこともなし

柿本人丸

二〇〇
久かたのあめしらしぬる君ゆゑに日月もしらずこひわたるかも

二〇八
秋山のもみぢをしげみまどひぬる妹をもとめん山ぢしらずも

二一一
こぞ見てし秋の月夜はてらせれどあひ見し妹はいや年さかる

二一六
家にきてわがやをみれば玉床のほかにむきけり妹がこまくら

二一九
あまかぞふおほつのこらがあひし日におほにみしかばいまぞくやしき

二二一
妻もあらばつみてたげましさみの山のゝへのうはぎすぎにけらずや

かも山のいはねしまけるわれをかもしらずと妹がまちつゝあらん

依羅娘子

けふけふとわがまつ君は石川のかひにまじりてありといはずやも

河辺宮人

二二八
妹が名は千代にながれんひめしまのこまつがうれにこけむすまでに

博通法師

三〇八
ときはなるいは（や）は今もありけれどすみける人ぞつねなかりける

岩代の[illegible]松の木[illegible]昔の人[illegible]ごとし

四一五
家ならは妹か手まかん草枕旅にこやせる此旅人あはれ

聖徳皇子（シヤウトクノミコ）

手持女王

四一八
豊国の鏡の山の岩戸たてこもりにけらしまてとこまさぬ

四一九
いはとわるたちからもかもたよわきをみなにしあれはすへのしらなく

丹生王

四二二
石上ふるの山なる杉村の思ひ過へき君ならなくに

作者未詳

四五二
妹として二人作りし我宿はこたかくしけくなりにけるかも

[illegible]

[illegible]

大伴家持

三六五
今よりは秋風さむく吹なんをいかてかひとり長き夜をねん

大伴書持

長き夜を独やねんと君かいへは過にし人の思ほゆらくに

大伴家持

五六
秋さらは見つゝしのへと妹かうへし宿のなてしこ咲にけるかも

五八
吾宿の[illegible]咲花の[illegible]

吹芡刀自

一七〇
川つらのゆつ岩むらに草むさす常にもかもな常をとめにて

海犬養岡麻呂

六三十
御民われいけるしるしあり天地のさかゆる時にあへらく思へは

志貴皇子

ガラス使用

八十四
いそはまにかへみちくみさわひのもとへゝる きゝよなりけり 兼略

太上天皇 正え 大納言經

一云に
はるきてうことゝ祝ふらむ君か代まてつきせぬなくは万代まてよ

大伴家持

十七廿一
中上のふらひとゝいひちゝへあら部山かゝるあまなれ

十八二之
ほあらつきの御代さかえんとあつまなるやちよくさは
こうねもとめ

ちらゝまのまて 紀

なし東人へ あつさぬにたとひて 万葉集
みやこのことかよみてくらしあやすけれなれ
校日きさらぬ みきはなきもいの部 つらひきら
名なとしくゝさゝ 雨の中よそてありとうき
みられめてきこし つけられ名ら ことなうらとも
をうえひちふのありらしこへあふひをとの
きつもふつゝてしまうさゝのくさわうもあ現
て十年とのなし ぬらいうきてあの比年まて

ガラス使用

もて やまて 千哥となん なつけ侍りけるかな
あつめえらひて あはれこのとし みやよひ
乃末風りまなるも

中西通元 書

ガラス使用

大和國　　　　寧楽宮天皇大御哥

九三
[illegible]水の上は[illegible]
[illegible]
[illegible]

　　　　山上憶良
三二
神代よりいひつてけらくそらみつやまとの國はすめかみの
いつくしき國ことたまのさきはふ國とかたりつきいひつかひけり今の世の
人もことことめのまへにみたりしりたり人さはにみちてはあれとも
たかてらすひのみかとかみなからめてのさかりにあめのしたまをし
たまひし[illegible]

三三
[illegible]國[illegible]
　　　　[illegible]
[illegible]天地の[illegible]國[illegible]

大和国

寧樂宮天皇大御哥

十九ノ四二
そらみつやまとの国ハ水の上ハ地ゆくごとく舟の上ハとこにをること
おほかみの志つむる国そよつの舟ふなのへならへたひらけくはやわ
たりきてかへりことまをさむ日にあひのまむさけそこのとよみきハ

山上憶良

五ノ三一
神代よりいひつてけらくそらみつやまとのくにハすめらかみのいつく
しき国言霊のさきはふ国とかたりつきいひつかひけり今の世の
人もことごとめのまへにみたりしりたり人さはにみちてハあれども
たかひかる日のみかとかむながらめでのさかりにあめのしたま
をしたまひし　下略

柿本人麿

十三ノ十
志きしまのやまとの国ハことたまのたすくる国ぞまさきくありこそ

藤原内大臣　仲万呂

廿ノ五六
いさこともたハわさなせそ天地のかためし国そやまとしまねハ

畿内（ウチツクニ）

山城國　（和名抄云夜萬之呂　古書山背）

久邇　相樂郡　（みかの原　ふたきの宮　こま山　同原　かせ山　同山）

作者未詳

六ノ四三
あきつかミわかすめろきのあめのしたやしまの中に国ハしもさハに
あれとも里ハしもさハにあれとも山並のよろしき国と川なミのたち
あふ里とやましろのかせ山のまに宮はしらふとしきたてゝたかし
らすふたきの宮ハ川ちかミ瀬のとそきよき山ちかミとりかねとよ
むあきされハ山もとゝろにさをしかハつまよひとよめ春されハ岡へも
しゝにいはほにハ花さきをゝりあなおもしろふたきの原にいとたふと
き大宮ところうへしこそわか大君ハ君なからきかしたまひてさ
す竹の大宮こゝとさためけらしも

反歌
みかの原ふたきの野へをきよミこそ大宮ところさためけらしも
山たかく川の瀬きよし百世まて神しミゆかん大宮ところ

同

六ノ四四
わか大君神のミことのたかしらすふたきの宮ハ百木もり山ハ
こたかしおちたきつ瀬の音もきよしうくひすのきなく春へハいはほにハ
山下てらしにしきなす花さきをゝりさをしかのつまよふ秋ハあまき
らふしくれをいたミさにつらふもみちちりつゝやちとせにあれつかし
つゝあめのしたしらしめさむと百よにもかはるへからぬ大宮ところ

反歌
いつミ川ゆく瀬の水のたえはこそ大宮ところうつろひゆかめ
ふたき山やまなミ見れハ百よにもかはるへからぬ大宮所
をとめらかうミをかくといふかせの山時しゆけれハ都となりぬ
かせの山こたちをしけミ朝さらすきなきとよもす鴬のこゑ
こま山になくほとゝきすいつミ川わたりをとほミこゝにかよはす

大伴家持

四ノ五六
今しらすくにの都に妹にあはて久しくなりぬゆきてはやミむ
六ノ四十
今つくるくにのミやこハ山川のきよきをミれハうへしらすらし
八ノ五三
今つくるくにの都に秋の夜のなかきにひとりぬるかくるしさ

ガラス使用

作者未詳
六ノ四五
みかのはらくにの都ハ山たかく川の瀬きよみありよしと人ハいへとも
ありよしとわれハおもへとふりにし里にしあれハ国みれと人も
かよはす里みれハ家もあれたりはしけやしかくありけるかみもろ
つくかせ山のまに咲花の色めつらしく百鳥の声なつかしくあり
かほしすみよき里のあるらくをしも

反歌
みかのはらくにの都ハあれにけり大宮人のうつりいぬれハ
咲花の色ハかはらすもゝしきの大宮人そたちかはりぬる

同
四ノ二十二
みかのはらたひのやとり
いつみ川　同上
作者未詳
九ノ十一
妹か門いりいつみ河のとこなめにみゆきのこれりいまたふゆかも
境部老麻呂
七ノ十七
妹かついまいつみ川の瀬をきやすわかまつまつくおしめすらし

十七ノ九
山しろのくにのみやこハ春されハ花咲をゝり秋されハもみちハ
にほひおハせるいつみ川のかみつ瀬にうちはしわたしよと瀬にハ
うきはしわたしありかよひつかへまつらむよろつよまてに

反歌
たゝなめていつみ川のみをたえすはつかへまつらんおほミやところ
石川広成
いつみのさと　同上
四四五
いへ人にこひすきめやもかはつなくいつみのさとに年のへぬれハ
作者未詳
十一ノ十
山しろのいつみの小すけおしなへていもか心をわれハおもはす
同廿七
こゑホ川いつみのわたりにたつ民のやむときもなく恋わたるかと
大伴家持
いくち山　同上
三ノ五九
はしきかもみこのみことのありかよひみしいくちの道ハあれにけり
わつか山　同上
同
同五七
かけまくもあやにかしこしいはまくもゆゝしきかも吾おほきみみこの
みことのよろつよにめしたまはましおほ日本くにのみやこハうちなひく

ひくまさやあられハ山へにハ花咲きて河風にハあゆこさはしてハ皆
けふさりゆるゆたさきとのまうこととかと志らうへにそゆ白よれひて
らつる山ちうしたうしてくらまれあゆ志らきぬれこいちらひひつちな
けるもきんすへもあし　展之

及行

わか大きミ天志らさんとおもハねハおほにそミけるわつかそま山

一ノ九
秋の野のミくさかりふき屋とれりしうちのミやこのかりほしおもほゆ
　宇治　都名　　　　　　　　　　額田姫王

七ノ十一
うち人のたとへのあしろ我ならハ今ハよらましこつミこすとも
　　　　　　　　　　　　　　作者未詳
三ノ十八
もゝのふの八十氏川のあしろ木にいさよふ浪のゆくへしらすも
　宇治川　　　　　　　　　　　柿本人丸
七ノ十一
うち川ハよとせなからしあしろ人舟よふこゑハをちこちきこゆ
　　　　　　　　　　　　　　作者未詳
ロ
うち川におふるすかもを川はやミとらすて来にけりつとにせましを
ロ
うち川をふなわたせをとよハへともきこえさるらしかちのともせす
ロ
ちはや人うち川浪をきよミかも旅ゆく人のたちかてにする
十ノ八
ちはや人うちのわたりのせをはやミあハすこそあれのちもわかつま
ロ廿四
ものゝふの八十氏河のはやき瀬にたちえぬ恋もわれハするかも
　頭らたちても君ハらすれゆまつも
　山吹乃瀬　古口示
九ノ十一
秋風のやまふきのせのひゝくなへ天雲かける雁にあへるかも
　大くらの入江　　　　　　　　　作者未詳
ロ
おほくらの入江ひゝくなりいめ人のふしミかたゐにかりわたるらし
　山科の鏡山　宇治郡
二ノ四
やすミしゝわこおほきミのかしこきやミはかつかふる山科のかゝミの山によるハもよのことことひるハもひのことことねのミをなきつゝありてやもゝしきの大宮人ハゆきわかれなん
　　　　　　　　　　　　　　額田姫王
　いはたの森　口上
九ノ十六
山しなのいはたのもりにぬさおかハけたしわきもにたゝにあはむかも
　　　　　　　　　　　　　　藤原宇合

作者未詳
十二ノ三 やましろのいはたの杜にこゝろおそくたむけしたれハ妹にあひかたき
石田の小野　同上　　藤原宇合
九ノ十六 山しなのいはたのをのゝはゝそはらみつゝや君か山ちこゆらん
久世　郡名　　作者未詳
七ノ八旋頭 やましろのくせのやしろの草なたをりそおのかときとたちさかゆとも
くさなたをりそ
十一ノ三同 やましろのくせのわくこかほしといふわれあふさはにわれをほしといふ
やましろのくせ
鷺坂　久世郡　　作者未詳
九ノ十 白鳥のさきさか山の松かけにやとりてゆかな夜もふけゆくを
同十二 たくひれの鷺坂山のしらつゝし我にゝほはね妹にしめさん
同十三 やましろのくせのさきさか神代より春ハもえつゝ秋ハちりけり
名木川　同郡　　同
九ノ十一 衣手の名木の河つをはるさめにわれたちぬると家おもふらんか

くひ山　（式山城国綴喜郡咋岡神社 此可見）　　作者未詳
九ノ十二 春草を馬くひの山ゆこえくなる雁か使ハやとりすくなり
棚倉　式山城国綴喜郡棚倉神社　　同
十九ノ四十 手束弓手にとりもちて朝かりに君ハたちいぬたなくらの野に
入野　式山城国乙訓郡入野神社　　同
七ノ廿六旋頭 たちのしりさやにいりのにくすひくわきもまそてもてきせてん
とかもなつくさかると
かも川　　作者未詳
十一ノ八 鴨川ののち瀬しつけくのちもあハむ妹にハわれハ今ならすとも
高槻　　高市黒人
三ノ廿七 とく来てもみてましものを山しろの高のつき村ハ散にけるかも
阿保山　（山城のあたりに在 伊賀の国にも同名あり）　　作者未詳
十ノ十 阿保山のさくらの花ハけふもかもちりまかふらん見る人なしに

ガラス使用

河内國

七ノ卅
かふちめの手染のいとをくりかへしかたいとにあれとたえんともへや　作者未詳
九ノ十二
ぬはたま乃夜霧ハたちぬ衣手をたかやのうへにたなひくまてに
高屋（古市郡）　舎人皇子
口十九
しなてるかたしハ河乃さにぬりの大橋の上ゆ紅のあかもすそ引山
片足羽川（文安郡と云り）　作者未詳
あゐもてすれるきぬきてたゝひとりいわたらすこハわかくさのつま
かあるらんかしのみのひとりかぬらんとはまくのほしきわきもか家
乃志らなく

反歌

大橋乃へに家あらは心くひとりゆくこにやとかさましを
弓削河原（若江郡）　同
七ノ三八
まかなもてゆけのかはらの埋木のあらはるましきことにあらなくに
草香江（又日下とくさかと訓）　同

八ノ十五
おしてる難波をすきてうちなひく草香の山を夕暮にわか越くれハ
山もせにさけるあせひのにくからぬ君をいつしかゆきてはやみん
大伴旅人
四ノ廿八
くさか江の入江にあさるあしたつのあなたつゝし友なしにして
依網
よさみの原（津國にもあると）　作者未詳
七ノ廿八旋頭
あをみつらよさみの原に人もあはんかもいはゝしのあふみあかたの
かたりせむ
ちぬの海　同
七ノ十二
妹かため貝をひろふとちぬの海にぬれにし袖ハほせとかハかす
十一ノ十二
ちぬの海乃濱への小まつねふかめて吾恋わたる人のこゆゑに
或云　志ほひの小松ねもころに恋やわたらん

ガラス使用

和泉國

高師濱　大鳥郡

一ノ七六 大伴乃たかしの濱乃松かねをまきてしぬれといへししのはゆ　作者未詳

とろしの池　（聖武紀云至和泉国所石頓宮 式云今も登呂須池と云ありと）　同

十四二 いもかてをとろしの池の浪のまゆとりかねけになく秋すきぬらし

さたのうら　出雲国にも在　同

十二ノ三六 おきつなみへなみのきよるさたの浦のこのさたすきて後こひんかも

十二ノ廿 さたの浦によするしらなみあひたなくおもふをいかて妹にあひかたき

摂津國

丈部足人

廿ノ卅 つの国乃海のなきさにふなよそひたしても時にあもかめもかも

難波　宮津崎沼国　作者未詳

十三ノ廿二 おしてるなにはの崎に引のほるあけのそほふねそほふねにつなとりかけひこつらひありなみすれといひつらひありなみすれとありなみえすそいはれにし我み

笠金村

六ノ十四 おしてる難波の国はあしかきのふりぬる里と人皆のおもひやすみてつれもなくありしあひたにうみをなすなからの宮にまきはしらふとたかしきてをす国をおさめたまへはおきつとりあちふの原にものゝふのやそとものをはいほりしてみやこなしたりたひにはあれとも

反歌

荒野らに里はあれともおほ君のしきます時は都となりぬ

あまをとめたなゝし小舟こきつらし旅のやとりにかちのおときこゆ

作者未詳

六四六 やすみしゝ我大きみのありかよふなにはの宮はいさなとり海かたつき

てまひろふ濱へをきよみあさハふる浪のとさわきゆふなきにかちの
ときこゆ暁の寐さめにきけハあまえのしほひのむたにうらすにハ
千鳥つまよひあしへにハたつかねとよみみる人のかたりにすれ
ハきく人のみまくほりするみけむかふあちふの宮ハ見れとあかぬかも

反歌

ありかよふ難波の宮ハ海ちかみあまをとめらかのれる舟見ゆ
しほひれハあしへにさわく白鶴の妻よふこゑハ宮もとゝろに

大伴家持

廿ノ廿五
すめろきのとほき御代にもおしてる難波のくにゝあめのしたし
らしめしきと今の世にたえすいひつゝかけまくもあやにかしこし
神なからわご大君のうちなひく春のはしめハやちくさに花咲に
ほひやまみれハ見のともしく河見れハ見のさやけくものことにさ
かゆる時とめしたまひあきらめたまひしきませる難波の宮ハき
こしめすよものくにより たてまつるみつきの舟ハほりえよりみをひき
しつゝあさなきにかちひきのほりゆふしほにさをさしくたりあちむ
らのさわききほひて濱に出てうなはらみれハしら浪のやへをるかうへに
あまをふねはらゝにうきておほみけにつかへまつるとをちこちにいさり
つりけりそきたくもおきろなきかもこきはくもゆたけきかもこゝみれハ
うへし神代ゆはしめけらしも

反歌

（劉曰桜ハ梅ノ誤ト）さくら花今さかりなり難波の海おしてる宮にきこしめすなへ
海原のゆたけき見つゝあしかちる難波に年ハへぬへくおもほゆ

作者未詳

七ノ十四
なにはかたしほひにたちてみわたせハあはちのしまにたつわたるみゆ

十一ノ廿七
難波人芦火たくやのすしてあれとおのかつまこそとこめつらしき

四ノ十四
おしてるなにハすかゝさおきふるし後ハたかきん笠ならなくに

十二ノ三六
なにハかたこきつるふねのはろゝにわかれてくれとわすれかねつも

大伴旅人

四ノ廿九
わきもこを人になみせそあひきする難波男のてにハふるとも

河辺宮人

ガラス使用

二ノ四三
なにはかたしほひなありそねしつみにし妹かすかたをみまくくるしも

藤原宇合

三ノ九六
むかしこそ難波ゐなかといはれけめ今ハ都をはくゝひにけり

大伴宿奈麻呂

四ノ廿
なにはかたしほひのなこりあくまてに人のみるこをわれしともしも

山上憶良

五ノ卅二
難波津にみふねはてぬときこえこハひもときさけてたちはしりせん

神社老麻呂

六ノ九六
難波かたしほひのなこりよくみてむ家なる妹かまちとハむため

ロ
たゝこえのこのみちにしておしてるや難波の海と名つけゝらしも

丹比屋主

八ノ十八
難波へに人のいくれハおくれゐてわかなつむこをみるかかなしさ

丹比真人

九ノ十五
難波潟志ほひにいてゝ玉もかるあまをとめともなかなのらさね

丹比部國人

廿ノ十七
八十國は難波につとひ船かさりあかせん日ろを見も人もかと

丸子多麻呂

ロ
なにはつによそひよそひてけふの日やいてゝまからん見る母なしに

丈部山代

ロ廿三
よそにのみ見てやわたらも難波潟雲ゐにみゆる嶋ならなくに

若舎人部廣足

ロ廿六
難波つにみ舟おろすゑやそかぬき今ハこきぬと妹につけこそ

物部道足

ロ
おしてるや難波の津より船よそひあれハこきぬと妹につけこそ

大田部三成

ロ廿九
難波とをこきてゝ見れハ神さふるいこまたかねに雲そたなひく

上毛野牛甘

ロ卅五
なにはちをゆきてくまてと吾妹子かつけしひもかを絶にけるかも

御津（西成郡ノ濱）

四ノ十六
たをやめのくしけにのする鏡なす御津の濱へにさにつらふ紐ときさ

ガラス使用

さけすわきもこにこひつゝをれは明くれの朝霧かくり鳴たつのね
のみしなかゆわかこふるちへのひとへもなくさむる心もあるやと家のあたりを
我たちみれは青旗のかつらき山にたなひける志らくもかくる天さかる
ひなの国へにたゝむかふあはちをすきてあはしまをそかひにみつゝ朝なき
なきにかこのこゑよひゆふなきにかちのをとしつゝ浪のうへをいゆきさ
くゝみいはのまをいゆきもとほりいなひつまうらみをすきてとり
しものなつさひゆけは家のしまありそのうへにうちなひきしゝにおひたる
なのりそかなとかもいもにのらすきにけん

反歌
志ろたへの袖ときかへてかへりこん月日をよみてゆきてこましを

山上憶良
一ノ廿六 いさこともはやく日本へおほとものみつの浜松まちこひぬらし
五ノ卅二 おほとものみつの松原かきはきて我たちまたんはやかへりませ

角兄麻呂
三ノ廿三 志ほひのみつのあまめのくゝつもち玉もかるらんいさゆきてみん

四ノ七六 おほとものみつとはいはしあかねさしてれるつくよにたゝにあへりとも

加茂女王

作者未詳
一ノ廿七 おほとものみつの浜なる忘れ貝家なるいもを我わすれておもへや
七ノ十二 大とものみつの浜へをうちさらしよせくる浪のゆくへしらすも
ロ十七 朝なきにまかちこきてゝみつゝこしみつの松原浪こしにみゆ
十ノ卅五 志ろたへのみつのはまへにいてゝいさなてのみそ我こふらくは
ロ廿六 おほとものみつのしら浪あひたなく我こふらくを人のしらなく
十五ノ六 おほとものみつにふなのりこきてゝはいつれの島にいほりせんわれ
ロ卅 ぬはたまの夜あかしもふねハこきゆかんみつの浜松まちこひぬらん
ロ 大とものみつのとまりにふねはてゝ立田の山をいつかこえなん

高津　角兄麻呂
三ノ廿二 ひさかたの天のさくめかいはふねのはてし高津ハあせにけるかも

姫島　河辺宮人
二ノ四三 妹か名ハちよになかれんひめしまの小松かうれにこけむすまてに

堀江　　作者未詳

七ノ十二　さよふけて堀江こくなるまつら舟かちのおと高しみをはやみかも
十ノ卅八　おしてる難波堀江のあしへにハ雁やとれるかしものふらくに
十三ノ廿九　妹かめを見まく堀江のさゝら浪しきて恋つゝありとつけこそ
十八ノ十二　堀江より水を引しつゝ御舟さすしつをのともハ河の瀬申せ
廿ノ四九　あしかりに堀江こくなるかちのおとハ大宮人のみなきくまてに
〃　ほり江こくいつての舟の檝つくめおとしはたちぬみをはやみかも
〃　堀江よりみをさかのほるかちのおとのまなくそならハこひしかりける
〃　ふなきほふ堀江の河のみなきはにきゐつゝなくハ都鳥かも

大伴家持

〃十九　さきもりの堀江にこきつるいつて舟かちとるまなく恋ハしけゝん
〃廿三　ほり江より朝しほみちによるこつみ貝にありせハつとにせましを

藤原執弓

〃五五　ほり江こえとほき里まておくりける君か心ハわすらゆましも

左大臣橘公

六ノ十　堀江にハ玉しかましを大きみの御舟こくんとかねてしりせハ

寧樂宮太上皇（元正）大御哥

〃十一　玉しかす君かくいていふ堀江にハ玉しきみてゝつきてかよはん
或云玉こきしきて

三嶋江（玉江　或三嶋神社）

作者未詳

七ノ卅四　三しまえの玉江のこもをしめしよりおのかとそおもふいまたからねと
十一ノ三九　三しま江の入江のこもをかりにこそ我をハ君ハ思ひたりけれ
〃四八　みしま菅いまたなへなり時またハきすやなりなん三嶋すかゝさ

住の江（作者もすみのえとよむへし　郡の名也）

車持千年

六ノ十五　いさなとり濱へをきよみうちなひきおふる玉もに朝なきにちへ
浪よせ夕なきにいほへ浪よするへつ浪のいやしく〳〵に月に
けに日にひにみとも今のみにあきたらめやも白浪のいさきめ
くれるすみの江の濱

反歌

しら浪のちへにきよするすみの江の岸のはにふににほひてゆかな

六ノ卅九
かけまくもゆゝしかしこしすみのえのあら人かみのふなのへにうしは
きたまひつきたまはむしまのさき〳〵よりたまはむいそのさき〳〵あらき
浪風にあはせすつゝみなくやまひあらせすすむやけくかへしたまは
ねもとのくにへに　作者未詳

十九ノ廿六
そらみつやまとの国あをによしならのみやこゆおしてる難波にくたりすみ
のえのみつにふなのりたゝわたり日の入国につかはさるわかせの君を
かけまくのゆゝしかしこき住吉のわか大御神ふなのへにうしはきいま
しふなともにみたゝしましてさしよらむいそのさき〳〵こき
はてむとまり〳〵にあらき風浪にあはせすたひらけくゐてかへりませ
もとのみかとに　〃

反歌
おきつなみへなみなこしそ君かふねこきかへりきてつにはつるまて
長皇子

一ノ廿六
あられうつあられ松原すみのえのおとひをとめとみれとあかぬかも

三ノ二三
すみのえの岸の松原とほつ神わか大君のいてましところ
角兄麻呂

〃四一
しめゆひて吾かさためてし住吉の濱の小松ハ後もわかまつ
金明軍

十九ノ三六
すみのえにいつくはふりか神ことゝゆくともくともふねははやけむ
多治土佐

六ノ卌
住吉の小濱のしゝみあけもみすこもりてのみやこひわたりなむ
作者未詳

〃卅一
こまのあゆみおさへとゝめよすみのえのきしのはにふににほひてゆかむ
安倍豊継作

七ノ十二
くやしくもみちぬるしほか住吉の岸の浦わゆゆかましものを
作者未詳

〃
めつらしき人をわきへにすみのえのきしのはにふをみむよしもかも

〃
いとまあらはひろひにゆかむ住吉の岸によるといふこひわすれかひ

ガラス使用

口うまなめてけふわかみつるすみの江の岸乃はにふをよろつよにみむ
口十三住の江にゆくといふみちにきのふみし恋わすれかひことにしありけり
口住の江の岸に家もかおきにへによするしら浪みつゝしのはむ
口住の江乃遠里小野乃まはきもてすれる衣乃さかりすきゆく
口十四住の江のおきつしら浪風ふけはきよする浜をみれはさやけき
口住の江の岸の松かねうちさらしよせくる浪のおとのさやけさ
口廿五住の江乃あさゝは小野乃かきつはたきぬにすりつけきむ日しらすも
十ノ十二住の江乃里ゆきしかは春花乃いやめつらしき君にあへるかも
口卆住の江の岸を田にほりまきしいねしかもかるまてあはぬ君かも
十一ノ卅七住の江のつもりあひきのうけのを乃うかれかゆかん恋つゝあらすは
口卅六住の江乃岸のうらみにしく浪のしくしく妹をみるよしもかも
口四十二住の江乃浜によるてふうつせかひみなきことゝてわれ恋めやも
十二ノ廿九住の江乃きしにむかへるあはち嶋あはれと君をいはぬ日はなし
十六ノ廿九住の江乃岸野ゝ萩ににほふれとにほはぬわれやにほひてをらん
口十住の江のをつめにいてゝうつゝにもおのかつますらをかゝみとみつも

七ノ廿六旋頭住の江のなみつま君かむまのりころもさひつらふをとめをすゑてぬへる
ころもそ
口住の江のいてみの浜のしはなかりそねをとめらかあかものすその
ぬれてゆかんみん
口すみの江乃小田をからすこやつこもなきやつこあれといもかみためと
わたくし田かる
あさかの浦　同　弓削皇子
二ノ十六ゆふさらは志ほみちきなむすみの江のあさかの浦にたまもかりてな
えなつ川　同　高市黒人
三ノ廿一住の江のえなつにたちてみわたせはむこのとまりゆいつるふな人
志きつの浦　同　作者未詳
十二ノ廿六住の江乃志きつの浦のなのりそのなはのりてしをあはなくもあやし
なこの浜　海　同　同
七ノ十三住の江乃なこの浜へにこまなめてたまひろひしくつねわすれす
口なこの海のあさけのなこりけふもかもいそのうらわにみたれてあらん

ガラス使用

同四二　あこの海を朝こきくれハうら中にかこそよふなるあはれそのかこ　仙覺律師
あこ
同十三　雨ハふるかりほハつくるいつのまにあこのしほひに玉ハひろはん　同
同十四　時つ風ふかまくしらにあこの海の朝けの志ほに玉もかりてな
真野　八部郡　高市黒人
三ノ廿九　いさこともやまとへはやく白菅のまのゝ萩原たをりてゆかん
こたへ　同人妻
同　志ら菅のまのゝ萩原いくさくさ君こそ見らめまのゝ萩はら
七ノ十四　いにしへにありけん人のもとめつゝきぬにすりけんまのゝ萩原　仙覺律師
同卅四　小菅ぬまのゝ萩原心ゆもおもはぬきみかころもにすりぬ
まのゝ池　同
十一ノ四十　まのゝ池の小菅を笠にぬはすして人のとほなをたつへきものか
まのゝ浦　吹黄刀自
四ノ十三　まのゝ浦のよとのつき橋心ゆもおもへやいもかいめにしみゆる
ふか

十一ノ四十　わきもこか袖をたのみてまのゝ浦の小菅の笠をきすてきにけり　仙覺律師
武庫浦　河郡　武庫郡　山部赤人
三ノ三三　むこの浦をこきたむ小舟あは島をそかひにみつゝともしき小舟
十五ノ八　むこの海のにはよくあらしいさりする海人の釣舟波のうへゆみゆ　柿本人麻呂
巻三　けひの海の　みたれいつみゆあまのつりふね
同四　むこの浦の入江のすとりはくゝもる君をはなれて恋にしぬへし　仙覺律師
同六　朝ひらきこきてくれハむこの浦の志ほひのかたにたつか声すも
十七ノ七　玉はやすむこのわたりに天つたふ日のくれゆけハ家をしそおもふ
むこ川　同郡　同
七ノ十二　むこ川の水をはやみかあかこまのあかくそゝきにぬれにけるかも
なつき山　同郡　高市黒人
三ノ廿七　わきもこにゐなのハ見せつなつき山つのゝ松原いつかしめさむ

つぬ乃松原　作者未詳

十七ノ八
あまをとめいさりたく火乃おほゝしくつぬの松原おもほゆるかも

有ま山　名所歌　同

七ノ十二
志なかゝるゐな野をくれハ有ま山夕霧たちぬ宿ハなくして

十一ノ五九
大きミ乃ミ笠にぬへるありま菅ありつゝ見れとことなきわきもこ

十二ノ六四
ミな人の笠にぬふといふ有馬菅ありて後にもあはんとそ思ふ

猪名山　河名歌　同

十二ノ卅三
志なかゝるゐな山とよミに行水乃名にのミよせしこもり妻ハも

或曰名のミしよそりて恋つゝやあらん

ゐなの湊　同

七ノ十七
大海に嵐なふきそしなかゝるゐなの湊に舟はつる迄

ゐな川　今池田川と云　又我名川も云　同

十六ノ十一
かくのミにありけるものをゐな川乃おきをふかめて我かおもへりける

三ノ十九
志はつ山
志はつ山打こえ見れハ笠ぬひの嶋こきかくるたなゝし小舟

作者未詳

六ノ卅
ちぬまより雨そふりくる志はつの海人あみつなほせりぬれてたへんかも

水無瀬川　同

十一ノ七四
こともくハ中ハよとませみなせ川たゆといふことをありこすなゆめ

口四五
うらふれて物ハおもハしみなせ河ありても水ハゆくといふものを

敏馬（ミヌメ）浦　附大わたの濱　同

六ノ四六
八ちほこの神の御代より百船のはつるとまりと八嶋国もゝ船人乃さためてし敏馬の浦ハ朝風に浦浪さわき夕浪に玉もハ来よる志らまなこきよき浜へハゆきかへり見れともあかすうへしこそ見る人ことにかたりつきしのひけらしき百世へて志のハれゆかん清きしら浜

反歌

まそ鏡ミぬめの浦ハもゝ舟乃すきてゆくへき浜ならなくに　同

浜きよミうらうるハしミ神代より千ふねのはつる大わたの浜

三ノ三九
うつゝハあやしきものゝありちなる中にてかきてふ浜をいふに
めくらしみちまち月ありしけるぬハみさ柳ハ志ほをとらさしめ欽され
ちは潟をちさしめちはさゝの浜をうしこゝあちちなるいそうくらも
みそいつしも此夜のあかんとまつらしにいれてよしなハ潮のへのあ
さみくきらんあくとらんそたちとよむらしいさことをあへてここさん
にそもちつけし

名欽

思ろつさひらぬめの浦をこきてあハ在事とこゑしてたつきの上ぞ
柿本人麿

三ノ廿五
うつみさきを浜をうしこゝしことりにのうちよせしみぬめ浦よ
大伴旅人

四五二
妹とこしみぬめの崎をかへるさにひとりしてみれハ涙くましも
作者未詳

つの國　日本紀

十ノ卅八
わきもこをきゝ佐々の邊のしなひねむ方ハしぬをすまれてしのへと

なハの浦　塩焼烟へし
日置少老

なはの浦に志ほやく
ふゆのかの國ちはなのこらう
ふしのうらとふあり
そてそめるへし
けふり夕されハ行過かねて山にたなひく
山部赤人

なはの浦ゆそかひにみゆるおきつ島こきたむ舟ハ釣をすらしも

須磨
大綱人主

三ノ四四
すまのあまの志ほやき衣の藤衣まとほにしあれハいまたきなれす（れ考）
山部赤人

六ノ十九
すまのあまのしほやききぬのなれなはかひとひも君をわすれておもはん
平群氏女郎

十七ノ十六
すま人の海へつねさらすやく塩のからき恋をもあれハするかも

九ノ三三
あしやのうなひをとめ
作者未詳
いにしへのますらをとこのあひきそひ妻とひしけむあしのやの
うなひをとめのおきつきをわかたちみれハなかき世のかたりにしつ
ゝのちの人志のひにせんと玉ほこの道のへちかくいはかまへつく
れる塚を天雲のそきへのかきりこの道をゆく人ことにゆきよりて
いたちなけかひある人ハ音にもなきつゝかたりつきしのひつき

ガラス使用

三ノ三九
わたつミハあやしきものかあハち島中にたてゝおきて白浪をいよに
めくらしゐまち月あかしのとゆハ夕されハしほをみたしめあけされ
ハしほをかれしむしほさゐの浪をかしこミあハち島いそかくれも
ゐていつしかも此夜のあけんとさもらふにいのねかてねハ瀧のへのあ
さのゝきゝすあけぬとしたちとよむらしいさこともあへてこきてん
にはも志つけし

反歌

島つたひみぬめの浦をこきくれハやまとこひしくたつさハになく

柿本人麻呂

三ノ廿五
みつのさき浪をかしこミこもりえのふねよせかねつミぬめの崎に

大伴旅人

四五二
妹とこしミぬめの崎をかへるさにひとりしてみれハ涙くましも

つか野　日本紀

作者未詳

十ノ卅八
わきもこをきゝつかのへのしなひねむわハしのひすまなくしおもへハ

なハの浦　[illegible]へし

日置少老

三ノ三八
なハの浦にしほやくけふりゆふされハゆきすきかねて山にたなひく

同
なはの浦ゆそかひに見ゆるおきつ島こきたむ舟ハつりをすらしも

山部赤人

須磨

三ノ四四
すまのあまの志ほやき衣の藤衣まとほにしあれハいまたきなれす

大網人主

六ノ十九
すまのあまのしほやきゝぬのなれなハかひとひも君をわすれて思ハん

山部赤人

十七ノ十六
すま人の海へつねさらすやく塩のからきこひをもあれハするかも

平群氏郎女

あしやのうなひをとめ

作者未詳

九ノ三三
いにしへのますらをとこのあひきそひ妻とひしけむあしのやの
うなひをとめのおくつきをわかたちみれハなかき世のかたりにしつゝ
のちの人しのひにせんと玉ほこの道のへちかくいはかまへつく
れる墓を天雲のそきへのかきりこのみちをゆく人ことにゆきよりて
いたちなけかひ人ハねにもなきつゝかたりつきしのひつき

こしをとめらかおくつき所もまして我ハかなしもいにし思へハ

反歌

いにしへのしのたをとこの妻とひしうなひをとめかおくつきそこれ

かたりつくからにもこゝた恋しきをたゝめにみけむいにしへをとこ

日

九ノ三五

あしの屋のうなひをとめかやとせこのかたなりの時ゆ小はなりにかみたくまでにならびをる家にも見えずうつゆふのこもりてをれハみてしかとしいふせき時し垣ほなす人のよふ時ちぬ男うなひをとこふせやたきすゝしきそひてあひよはひしける時ハやきたちのたかみおし練りしらまゆみゆきとりおひて水にいり火にもいらんとたちむかひきそへる時にわきもこか母にかたらくしつたまきいやしきわかゆゑますらをのあらそふみれハいけりともあふへくあれやしゝくしろよみにまたんとかくれぬのしたハへおきてうちなげき妹かいぬれハちぬをとこその夜いめ見えてとりつゝきおひゆきけれハおくれたるうなひをとこもいあふきてさけひおらひあしふみしはかみたけひてところをにまけしハあらしとかけはきの小たちとりはきところつらとめてゆきけれハやからともいゆきあつまりなかき世にしるしにせんととほき世にかたりつかんとをとめつか中につくりおきをとこつかこなたかなたにつくりおけるゆゑよしきゝてしらねともにひものことゝねなきつるかな

反歌

あしのやのうなひをとめかおくつきをゆきくとみれハねのみしなかゆ

つかのへのこのえなひけりきゝしことちぬをとこにしよるへらしも

十九ノ廿六

大伴家持

いにしへにありけるわさのくすはしきことゝいひつくちぬをとこうなひをとこのうつせみの名をあらそふとたまきはる命もすてゝもろともにつまとひしけるをとめらかきけハかなしさ春花のにほえさかえて秋の葉のにほひにてれるをしき身のさかりをすらますらをのことゝいたはしみちゝハゝにまをしわかれて家はなれてにいてたち朝よふにみちくる塩の八重浪になひく玉ものふし

ガラス使用

まもをしき命を露霜のすきましけれおくつきをこゝとさ
ためてのちのよのきゝつく人もいやとほにしぬひにせよとつけ
をくししかさしけらしおひてなひける

反歌

をとめらか後のしるしとつけをくしおひかはりおひてなひきけらしも

可考地名

巻三三十二ウ 阿倍乃島 云々

冂 大海 云々 志津乃岩屋

冂 四十六ウ 百不足八十隅坂

大和国

吉野郡

吉野（口山 口川）　みよしの乃山 口森　きさの小川 口森　きさの中山 口森
うぢ山 口森　たかきの山 口森　みくまり山 口森　人国山
あきつのゝ森　青根ヶ嶺　ゆふば川　あきつ野
なつみ乃河　なつみよど 口川　いめのわだ　國栖（くずの里）
丹生川（吉野 宇陀 宇智に有）

宇智郡

うちの大野　あらきの大野　おほあらき野

宇陀郡

うだの野　あきの乃野　すみ坂　室生

添上郡

寧楽　同古京　なら山　あすれ飛鳥
春日（口山 口里 口野）　三笠山　かすが山（三笠山乃苑）　櫟津
佐保川　手向山　たかへ乃山　羽易乃山

よしき川　高まと乃野（ノ宮 ノ山）　かゑこるの野　佐保（ノ川 ノ山）
いさ川
あき乃野
添下郡
菅原の里　さき沢（ノ野）　高野原　鳥貝川
伏見乃里　あらち山　そゝ山（ノ寺 ノ志け寺）
忍海郡
栗栖乃小野
高市郡
藤原（ノ宮 ノ御井）　軽　猟路乃池　そか乃川原
飛鳥（ノ川）　雷岳　神奈備（ノ里 ノ山 ノ川）　いはせの森
ま神乃原　やまの山（ノ川）　しまて乃とり
三垣山　坂田乃橋　檜のくま　つるきの池
さよすゝ乃池　こ勢山　乃と瀬川　まちの野
久米乃峯（ノ寺）　とゆらの寺　佐太の岡　橘乃嶋（嶋の宮 [illegible]）
橘寺　まがり乃池　ちくさ野　高とり山

十市郡
香具山　耳なし山　埴安（ハニヤス）乃池　あさ沢乃森
耳なしの池　石瀬（イハセ）野　竹田の原　くらはし山
磐余（イハレ）山（ノ池）　たむ乃山
城上郡
三輪（ノ川）ゝ崎山　よなばり　かげひ乃山（ノ寺）　あ川こ
あさしは乃野　泊瀬（ノ山 ノ川）　巻向山　あなしの山（ノ川）
ゆづきがだけ　椿市　志きの里
山辺郡
ふる（ノ山 ノ川）
葛上郡
葛城（ノ山）　朝妻山　たかま乃野
葛下郡
大坂　片岡
広瀬郡

廣瀬川
栗栖郷　いこま山　よさみの池
龍田山　をくら乃山　うちわ乃里　こまふち山
那古洋
あさし乃宮　あはしま山
あすか川山　とば山　井上　大原
勝間田の池

（志きしま　そらみつ）大和國（和名鈔云於保夜萬止古用大倭之字　天平九年改為大養德）

一ノ廿
我妹子をいさみの山を高みかもやまと乃見えぬ國とをみかも　石上大臣
一ノ廿六
いさこどもはやくやまとへ大とものみつ乃濱松まちこひぬらむ　山上憶良
一ノ廿八
我妹兒をはやみ濱風やまとなるわかまつ椿ふかさるなゆめ　長皇子
二ノ十三
吾背こを大和へやるとさよ更て暁露にわか立ぬれし　大伯皇女
六ノ廿一
あしたにはうなひにあさりし夕されはやまとへこゆる雁しともしと　膳王
六ノ廿二
やすみしゝ吾大君乃をす國八やまともこゝもおなしとそ思ふ　大伴旅人
一ノ廿七
大和こひいのねらえぬにこゝろなくこのすのさきにたつなくへしや　作者未詳

ガラス使用

六ノ廿三
大和路ハ雲かくれたり志かれともわかふる袖をなめしとおもふな

十ノ廿
倭にハなきてかくらむほとゝきすなかなくことになき人おもほゆ

十ノ廿七
秋風にやまとへこゆる雁かねハいやとほさかる雲かくれ都ゝ

十三ノ廿二
ちはやとらえをいめにうえつこそ大和ち乃ちはる幣とふかむけ吾する

十四ノ十九
うちひさす宮乃わかせハ倭女乃ひさまくことにあをわすらすな

十五ノ十七
海原乃おきへにともしいさる火ハあかしてともせやまとしまみん

こゝろを　吉野　郷名よしの山
なくハし　よしの乃川

柿本人麻呂

一ノ十八
やすみしゝ吾大君乃きこしをす天乃下に八国ハしもさはにあれとも山川乃きよきかふちとみこゝろをよしのゝ国乃はなちらふあきつ乃のへに宮柱ふとしきませハもゝしき乃大宮人ハ舟なめて朝川わたりふなきほひゆふ川わたる此川乃たゆることなくこ乃山乃いやたかしらす瀧乃みやこハみれとあかぬかも

反歌

みれとあかぬよしの乃川のとこなめ乃たゆることなく又かへりみん

一ノ十九　同

やすみしゝ吾大君神なから神さひせすとよしの川たきつかふちに高とのを高しりましてのほりたち国見をせせハたゝなはる青垣山山津み乃まつるみつきとはるへハ花かさしもち秋たてハもみちかさせり（或もみちハかさし）ゆきそふ川乃神とおほみけにつかへまつるとかみつせにう川をたち下つせにさてはしわたし山川とよりてつかふる神のみよかも

反歌

山川とよりてつかふる神なからたきつふちにふなでせすかも

笠金村

六ノ十
瀧の上乃みふねの山にみつえさし志ゝにおひたるとか乃木のいやつぎつぎによろつ世にかくししらさんみよしのあきつ乃宮ハ神からかたふとかるらん国からか見か欲しからん山川をきよみさやけみうへし神代ゆさためけらしも

反哥

年のはにかくも見てしかみよしのゝ清きかふち乃瀧つしらなみ

ガラス使用

山高み志らゆふ花におちたきつ瀧乃かふちハ見れとあかぬかも

同

六ノ十三
あしひきのみ山もさやにおちたきつよし野ゝ河乃川の瀬乃きよきを
見れバ上つにハちとり志ばなき下つにハかはつ妻よぶもゝしき乃大宮人
とこゑかてにことゝいよとつれハ見ることにあやにともしみ玉かつらたゆる
ことなくよろつ世にかくしもかもとあめつちの神をそいのるかしこけ
れとも

反哥

六ノ廿二
八隅知ゝ吾大君乃みしたまふよしぬゝ宮ハ山高ミ雲そたな引河
はやミ瀬乃とそきよき神さひて見れハたふとくよろしなへ見れハ
さやけし此山乃つきハ乃ミこそ此川のたえハ乃ミこそもゝしき
乃大宮所やむときもあらめ

反哥

神代よりよしのゝ宮にありかよひ高志らせるハ山川をよミ

作者未詳

十三ノ廿
みよしのゝみかねのたけ小（こゝらのみたけなるを金を金に誤るなるを）ひまなくぞ雨ハふるといふ時志
くぞ雪ハふるといふその雨乃ひまなきかごとその雪乃時志くかことひま
もおちず我ハぞこふるいもかまさかに

反歌

み雪ふるよしのゝたけにゐる雲乃よそに見し子にこひわたるかも

大伴家持

十八ノ廿二
高みくらあまの日つきとあめ乃下しらしめしけるすめろきの神
乃ミことのかしこくもはじめたまひてたふとくもさためたまへる
みよし乃此大宮にありかよひめしたまふらしものゝふの八十
とものをもおのかおへるおのか名おひて大君乃まけのまにまに此川のたゆることなく
なく此山乃いやつきつきにかくしこそつかへまつらめいやとほなかに

反哥

いにしへをおもほすらしも吾大君よしぬの宮をありかよひめす
ものゝふの八十氏人もよしぬ川たゆることなく仕へつゝ見ん
清御原宮天皇天武大海宮
一ノ十六
よき人乃よしとよく見てよしといひし吉野よく見よよき人よ君
額田姫王
二ノ廿四
みよしぬのたままつか枝ハはしきかも君かみことをもちてかよはく
弓削皇子
二ノ十五
よしぬ河ゆくせ乃はやみしはしくもたゆることなく有こせぬかも
土理宣令
三ノ廿六
みよしぬの瀧乃しら浪志らねともかたりしつけハいにしへ思ほゆ
柿本人麻呂
三ノ卌八
やくもさすいつものこらか黒髪はよしぬの川乃おきになつさふ
日
山のまゆいつもの子らハ霧なれやよしぬの山の峯にたなひく
笠金村
六ノ十
神からか見かほしからむみよしぬの瀧乃かふちハ見れとあかぬかも

日十一
はつせめのつくるゆふはなみよしぬゝ瀧乃みなわに咲にけらすや
車持千年
日
ちとり鳴よしぬゝ川のかはとなんやむときなしにおもほゆるきみ
日
あかねさす日ならへなくに吾恋ハよしぬ川乃霧にたちつゝ
大伴旅人
日廿二
はや人のせと乃いはほもあゆはしる吉野乃瀧になほ志かすけり
元仁
九ノ廿四
うまなめて打むれこえきいま見つるよしぬゝ川をいつかへりみむ
日十五
くるしくもくれゆく日かも芳野川きよきかはらを見れとあかなくに
日
よしぬ川かは浪高み瀧乃うらを見すかなりなん恋しけまくに
島足
九ノ十五
見まくほりこしくも志るくよしぬ川音のさやけさ見るにともしき
麻呂
日
いにしへ乃かしこき人のあそひけむよしぬゝかはら見れとあかぬかも
作者未詳

一ノ廿八 みよしのゝ山乃嵐のさむけくにはたやこよひもわかひとり寐ん
七ノ七 いましくはみめやと思ひしみよしのゝ大川よとをけふみつるかも
同 馬なめてみよしの河をみまくほりうちこえ来てそ瀧にあそひつる
同十 皆人のこふるみよしのけふみれはうへもこひけり山川きよみ
同十一 吉野川岩とかしはとときはなす我はかよはん萬代まてに
十ノ十 かはつなくよしのゝ川乃瀧の上のあしひの花そてにふれなゆめ
同四十一 みよしのゝいはもとさらすなくかはつうへもなきけり川をさやけみ
十三四 みよしのゝ瀧乃しら浪とおりにし妹にみせまくほしき白波
十一四十八 みよしの乃みくまか菅をあまなくにかりのみかりてみたれなんとや

日

十三四 斧とりてにふ乃檜山の木こりきてふねにつくりまかちぬきいそこきたみつゝしまつたひみれともあかすみよし乃ゝ瀧もとゝろにおつるしら浪

みふね山 吉野にて

車持千年

六ノ十一 うまこりはあやにともしくなる神の音のみきゝしみよしのゝまきたつ山ゆみおろせは川の瀬毎にあけくれは朝霧たち夕されはかはつなくなりひもとかぬ旅にしあれはわれのみして清き川原をみらくしをしと

反歌

瀧乃上のみふね乃山はかしこけと思ひわするゝ時と日もなし

弓削皇子

三ノ十三 瀧の上乃三ふねの山にゐる雲乃常にあらんと我おもはなくに
或云みよしのゝみふねの山にたつくもの

こたへ

春日王

同十四 大君はちとせにまさむ白雲もみふね乃山にたゆる日あらめや

作者未詳

九ノ十三 瀧乃上のみふねの山ゆあきつへにきなきわたるはたれよふことり
十ノ七 朝霧にしのゝにぬれてよふことりみふねの山ゆなきわたるみゆ

きさの小川 吉野にて

三ノ廿六
みよしのゝよし乃の宮ハ山からしたふとからし水からしさやけ
くあらし天地と長く久しく萬代にかはらすあらむいてましの宮　大伴旅人
反哥
むかしみしきさの小川を今みれハいよゝさやけくなりにけるかも　日
三ノ廿九
吾いのちと常にあらぬかむかし見しきさの小川をゆきてみんため
きさ乃中山　口
一ノ廿七
大和にハ嗚てかくらん呼子鳥きさ乃中山よひそこゆなる　高市黒人
うちま山　口
一ノ廿八
うちま山朝風さむし旅にして衣かすへき妹もあらなくに　作者未詳
三ノ卅三
みよしの乃たか城乃山に白雲ハ行はゝかりてたなひけりみゆ　釈通観

みくまり山　日
七ノ十
神さふるいはねこゝしきみよし乃ゝみくまり山をみれハかなしも　作者未詳
人国山　口
ワ卅九
みれとあかぬ人くに山乃木の葉をし吾心からなつかしみおもふ　口
ゆつるは乃三井　口
二ノ十四
いにしへにこふる鳥かとゆつるはのみゐの上よりなきわたりゆく　弓削皇子
青ねが嶺
七ノ九
みよし野乃あをねか峯のこけむしろ誰かおりけんたてぬきなしに　作者未詳
ゆふば川　口
七ノ八
吾ひもを妹か手もちてゆふは川またかへりみむ萬代までに

ガラス使用

口
いとゝひとゆふはらふちをいたしへのつらき人こそこゝをこれかなら

あすか川　堅口川

六ノ十四
やすみしゝわか大君はみよしのゝあきつの小野の野のへにはとみすゑ
おきてみ山にはいめたてわたし朝かりにしゝふみおこし夕かりに
とりふみたて馬なめてみかりそたゝす春のしけ野に
山部赤人

反哥

足引乃山にも野にもみかり人さつやたはさみみたれたるみゆ

四ノ卌五
かくしつゝあそひやらなんあきつ野にたなひく雲のすくとはなしに
大伴千室

六ノ十
みよし乃のあきつの川の萬代にたゆることなくまたかへりみん
作者未詳

七ノ廿
常ならぬ人国山のあきつのゝかきつはたをしいめに見しかも

口廿六
いそくゝの小野ゆあすか川に立わたる雲にしとあれやわすれまさん

口廿一
あきつ野を人のかくれは朝まきし君かおもほえて歎きはやます

口
あきつ野に朝ゐる雲のうせゆけはむかしも今もなき人おもほゆ

十ノ五十六
あきつのゝをはなかりそへ秋はきの花をふかさね君かかりほに

十二ノ五十四
みよしのゝあきつの小野にかるかやのおもひみたれてぬるよしそおほき

口廿七
わすれにし人をおもふにあきつ野にゐる白雲のやむ時もなし

なつみの川

三ノ廿六
よしのなる夏みの河のかはよとにかもそなくなる山かけにして
湯原王

九ノ十七
山たかみ志らゆふ花に落たきつなつみの川とみれとあかぬかも
作者未詳

口
大瀧をすきてなつみにちかつきて清き川瀬を見るかさやけさ
作者未詳

むつたのよと　堅川

七ノ七
音にきゝめにハいまたみぬ吉野川むつたのよとをけふみつるかも

九ノ十五
かはつなくむつたの川の川やきのねもころみれとあかぬ君かも
絹

ガラス使用

いめのわだ口　　大伴旅人
三ノ卅五
吾由記ハひさにハあらじいめのわだ瀬とならずて渕に有りこそ
作者未詳
七ノ十一
いめのわだことにしありけりうつゝにも見てこしものをおもひしおもへば
くだら（志はの池　くだらの旧里）
旧
十ノ十六
くだらわたりなつむ〳〵ん志は乃池の志は〳〵君をおもふ此ころ
丹生乃川（丹生ハ式又和名も吉野 宇陀宇智ならの郡也）
長皇子
二ノ十八
にぶ乃川瀬ハわたらずてゆく〳〵とこひいたむ吾せこちかよひこね
作者未詳
七ノ十四
飛騨人のまきながすといふにぶ乃川ことはかよへど舟ぞかよはぬ
宇智乃大野　宇智郡
中皇女命
一ノ八
玉きはるうちの大野に馬なめて朝ふますらんその草ふか野

あだの大野　旧跡
作者未詳
十ノ卌四
まくずはらなびく秋風吹くごとにあだの大野の萩の花ちる
十ノ卌二
あさ人のやかすらうす渕をともしみいとしてそ身かにをぬりと
おほあらき野（或云大和国宇智郡荒木神社大ハシヘタル也例有 又或説云山城国ニ有トイヘト詭ヲシラス）
作者未詳
七ノ卌四
かくしてやなほやおいなんみ雪ふる大あらき野乃しぬにあらなくに
十ノ卌
かくしてやなほりやなりなんも大あらきの浮田の杜の志めならなくに
宇陀乃野　宇陀郡
旧
二ノ卌
毛ころもを春冬とりまけていでましゝうたの大野ハおもほえんかも
七ノ卅七
大和乃うだのまそほのにつかばそこともか人の我をことなさん
丹治真人
八ノ卅八
うだの野乃秋萩しのぎなく鹿も妻にこふらく吾にハまさじ
安騎乃野

ガラス使用

柿本人麻呂

一ノ廿一
やすみしし吾大君たかひかる日乃みこ神なから神さひせすとふと
しかすみやこをおきてこもりくの初瀬乃山は真木たつあらき山路を
いはかねしもとおしなへ坂鳥のあさこえましてかきろひのゆふさ
りくれはみ雪ふるあきの大野にはたすすきしのをおしなへ草まくら
旅やとりせすいにしへおもほして

反歌
あきのにやとる旅人うちなひきいもぬらめやといにしへ思ふに
まくさかる荒野にはあれともみちはのすきにし君かかたみとそこし
ひむかしの野にかきろひのたつみえてかへりみすれは月かたふきぬ
ひなめしのみこのみことのうまなへてみかりたゝしゝ時は来むかふ

墨坂　同

柿本人丸妻

君か家にわかすみ坂乃家路をも我はわすれし命しなすは

室生（ムロフ）　式云宇陀郡室生龍穴神社
今も此郡に室の郷口村と云在

作者未詳

十ノ卌七
玉まとれむろふのけとくあさけくいひてしものをあしくすはやまし

寧樂　添上郡

同

一ノ廿九
すめろきのみことかしこみにきひにし家をもさかりこもりくの
初瀬乃川にみふねうけて吾ゆく川乃河くまの八十くまおちすよろ
つたひかへりみしつゝ玉ほこの道ゆきくらし青によしならの都乃
さほ川にいゆきいたりてわかねたる衣のうへよりあさつくよさやかにみ
れはたへのほに夜の霜ふりいはとこと川のひこりさむき夜を
やすむことなくかよひつゝつくれる家に千代まてにいませ大君よ
君と吾とかよはむ

反歌
青によしならの家には万代に吾もかよはむわするとおもふな

同

十五ノ九旋頭
あをによしならの京にゆく人もかも草枕旅ゆく船乃とまりつけんに

三ノ廿九
青によしならの都は咲花のにほふかごとく今さかりなり
小野老

口
藤なみの花ハさかりになりにけりならの都をおもほすやきみ
大伴四繩

口
吾さかりまたをちめやもほとゝにならの都をみすかなりなん
大伴旅人

六ノ十
龍のまもいまもえてしかあをによしならの都にゆきてこんため

八ノ五十四
あわ雪のほとろほとろにふりしけはならの都しおもほゆるかと
山上憶良

五ノ廿六
あまさかるひなに五とせすまひつゝ都のてふりハわすらえにけり
大伴家持

十八ノ廿六
青によしならにある妹かたかゝにまつらん心しかにハあらしか

十九ノ卅
青によしなら人見むと吾せこかしめけむもみちつちに落めやも
作者未詳

五ノ十一
たつのまをあれハもとめんあを丹よしならの都にこむ人のため

六ノ廿
かゝ我ゝ乃里に岩雲にまとしつけもよき人もかと

口卅二
紅にふかくそみにしこゝろかもならの都に年のへぬへき

口
いはつなのまた若かへりあをによしならの都をまたもみんかと

十ノ八十四
梅の花われハちらさしあをによしならなる人のきつゝみるかね

口五十五
我やとの萩咲にけりちらぬまにはや来て見へしならの里人

十五ノ七
青によしならの都にたなひけるあまのしらくもみれとあかぬかも

口九
海原を八十島かくりきぬれともならの都ハわすれかねつも

口十
山川のきよき河瀬にあそへともならの都ハわすれかねつも

同古京

作者未詳

六ノ四十二
やすみしゝ吾大君のたかしかすやまとの国ハすめろきの神の御代
よりしきませる国にしあれハあれまさんみこのつきつき天の下しらし
まさんと八百萬千年をかねさためけんならの都ハかけろひの
春にしなれハ春日山みかさの野へに桜花木のくれかくれかほ鳥ハ
まなくしはなく露霜の秋さりくれハいこま山（飛火）又やつりとふ火ろ

ガラス使用

岳に萩のえをしからミちらしさをしかハ妻よひとよめ山見れハ山も
見かほし里見れハ里もすミよしもの〻ふ乃八十とものをのうちはへ
て思へりしくハ天地乃よりあひのきはミ万代にさかえゆかむと
思ひにし大宮すらをたのめりしならの都を新世乃ことにしあれ
ハすめろきの引のまにゝ春花乃うつろひかハり村鳥の朝たち
ゆけハさす竹乃大宮人のふミならしかよひし道ハ馬も行す人も
行かねハあれにけるかも

反歌

立かハり古き都となりぬれハ道のしは草なかくおひにけり
なつきにしならの都のあれゆけハいてたつことになけきしまさる

大原今城

八ノ卅七
秋されハ春日の山乃もミち見るならの都乃あるらくをしも

大伴家持

十七ノ十二
青によしなら乃都ハふりぬれともとほとゝきすなかすあらなくに

作者未詳

六ノ四十二
世の中を常なきものと今そしるならの都のうつろふ見れは

ならら山

笠郎女

四ノ卅一
君にこひいとゝすへなみなら山乃小松か下に立なけくかも

縣吉男

八ノ四十三
なら山乃峯のもミちはとれはちるしくれの雨しまなくふるらし

三手代人名

八ノ四十四
なら山をにほはすもミち手折来てこよひかさしつちらはちるとも

寧樂宮天皇（聖武）大御哥

八ノ五十四
青によしなら山なる黒木もてつくれるやとハをれとあかぬかも

作者未詳

十ノ五十九
なら山乃峯なほきらふうへしこそまかきの下の雪ハけすけれ

十一ノ十二
なら山の小松かうれにあれはそ八吉とふ妹にあハてやミなん

背奈行文

十二ノ廿七
ふるさきなら乃山に帰る乃まかくはなしわかこふらくハ